

# VIEW21

ビュー21

2013

Vol. 4

中学版

## 特集

# 社会を生きる力を育む

——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

**学校事例** 東京都荒川区立諏訪台中学校 / 愛知県名古屋市立千鳥丘中学校  
大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校

**対談** 筑波大人間系教授 藤田晃之 / 東京都府中市立府中第三中学校校長 谷合しのぶ

**特別レポート** 「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

私を育てた  
あの時代、あの出会い

言葉少ない指導が気付く大切さを教えてくれた  
大分県佐伯市立佐伯城南中学校校長 國見義隆

Benesse発  
これからの教育

ハードに加え、人材育成で教育情報化を推進 大分県立大分豊府中学校

ミドルリーダーの挑戦  
一前へ! 前へ!!

教師全員の力を伸ばせるように校内研究を活性化させていきたい  
東京都墨田区立本所中学校 駒田るみ子



## 特集

3 **社会を生きる力を育む**

—— キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

## 4 課題整理

**将来の社会状況予測と現状のキャリア教育の課題**

## 9 学校事例1

**授業をキャリア教育の視点で改善し、  
社会で生きる力を育む**

東京都荒川区立諏訪台中学校



## 14 学校事例2

**1年生から将来を考えさせ  
目標を持って今をしっかりと進む**愛知県名古屋市立千鳥丘中学校  
ちどりがわか

## 18 学校事例3

**9年間の「いまとみらい科」で  
将来に結び付く社会参画力を育む**

大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校

## 22 対談

**全ての教育活動をキャリア教育を意識したものとするために**

筑波大人間系教授◎藤田晃之 / 東京都府中市立府中第三中学校校長◎谷合しのぶ

## 26 特別レポート

**小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う  
「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告**

## 連載

## 1 私を育てたあの時代、あの出会い

**言葉少ない指導が気付く大切さを教えてくれた**

大分県佐伯市立佐伯城南中学校校長◎國見義隆

## 28 Benesse発 これからの教育

**ハードに加え、人材育成で教育情報化を推進**大分県立大分豊府中学校  
ほうふ

## 30 ミドルリーダーの挑戦 —— 前へ! 前へ!!

**教師全員の力を伸ばせるように校内研究を活性化させていきたい**

東京都墨田区立本所中学校◎駒田るみ子

## 32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

\*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。  
また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます



## 「ぐいぐい引っ張るだけでなく 待つことも教師の役割」



がローテーションしながら、受け身や打ち込みを行う、というようなものです。苦労しましたが、研究大会では高い評価をいただくことが出来ました。

もちろん、指導案を作成するに当たっては、安部教頭や研究主任に見ていただきました。安部教頭からは具体的な指導は一切なく、「これはどういうことか」「自分ならこうする」などのメモ程度の指摘だけでした。安部教頭は、全てを私に言うの

ではなく、ポイントだけで私に何を改善すべきかを気付かせようとしていたのです。

### 方針はしっかり伝え 多くを語らず見守る

もう1つ、大きな気付きを得たのが、不登校の生徒を指導した2年間です。校長に「別の世界を見てこい。そうしたらもっと良い先生になれる」と言われ、大分県教育センターに赴任。当時は、不登校生専門の施

設がなく、不登校生は教育センターに通い、教師は彼らへの対応をしながら不登校生に対する指導法を模索していました。

私も数人を担当しましたが、生徒は私の言うことを聞いてくれません。これまでの私の指導は全く通用しませんでした。私はカウンセリグを学ぶため、何冊も本を読み、文部省の講習会などに参加しました。それで分かったのは、私には人の話を聞き、相手の気持ちを考える姿勢が足りないことでした。私は教育センターでの1年間、生徒と保護者の話を300件以上聞き、このことが人の話を聞く訓練になりました。

翌年、佐伯市に出来た適応指導教室に異動になりました。適応指導教室では、生徒がやりたいと言えば、料理、釣り、粘土工作と何でも一緒に言い、生徒と触れ合うことで信頼関係を築くことに注力しました。保護者に対しては、悩みをとことん聞き、それから生徒への対応などを話し合うようにしました。

ぐいぐい引っ張り、厳しく教えるだけでなく、話を聞き、待つことも教師の大切な役割なのだ、と考えられるようになりました。

本校に赴任してから、部活動の試合は出来るだけ応援に行き、学校行事や部活動、研究授業の様子などはスポーツ新聞風の学校新聞や学校のSNSでタイムリーに学内外に伝えています。発信を強化して、保護者会への参加率が高まりました。

昨年、学校教育目標を「何事にも挑戦する生徒（元気・勇気・笑顔）」に変えました。「気付き実践する」ことが出来たら、次はチャレンジしてほしいと考えたからです。生徒だけでなく、先生方に対しても同じ思いです。先生方には、前年踏襲ではなく、新しいことに挑戦し、責任は校長がとるから「失敗しなさい」と言っています。

校長になってから、若い頃、安部先生に教えられた哲学者の言葉、「良い教師は説明する。優れた教師は自らやってみせる。偉大な教師は心に火をつける」を校長室に貼っています。先生方に方針はしっかり伝えますが、安部先生を見習って決して多くは語らず、見守っています。時々こうしてほしいなと思うこともありませんが、自ら気付くことこそ成長につながる、と信じ、生徒、そして先生方と向き合っていこうと思います。

# 社会を生ききる力を育む

—— キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

「キャリア教育」という言葉は、

1999年、中央教育審議会の答申で初めて登場した。

「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、

自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる」とされ、

学校教育でのキャリア教育の基準となった。

国立教育政策研究所の調査によると、

中学校における職場体験の実施率は98.0%(\*）と高いが、

生徒の生き方にその実態はどう影響しているのか。

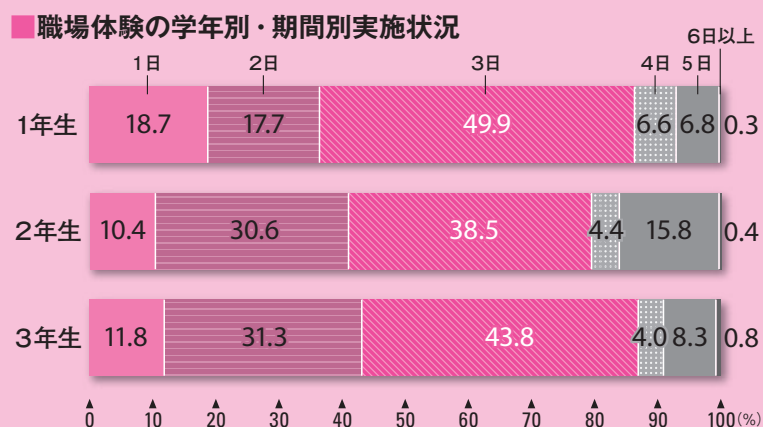
キャリア教育は生徒の意欲の向上につながっているのか。

「キャリア教育」について改めて考え、

生徒が社会を生きる力を育むものとするための手立てを考えたい。

\*数値は国立教育政策研究所「平成24年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果」(2013年9月)による

## 職場体験は3日以上の学校が多い



注1) 職場体験を実施していると回答した公立中学9,582校の、職場体験を実施している主たる学年の実施状況(1年生395校、2年生8,456校、3年生731校)

注2) 実施期間は、実際に事業所等で体験活動を行う期間とし、事前・事後指導等の時間(期間)は含まない

出典/国立教育政策研究所「平成24年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果」(2013年9月)

# 将来の社会状況予測と 現状のキャリア教育の課題

今の生徒たちが大人になる頃の社会はどのような状況にあるのだろうか。  
そして、現在のキャリア教育は、その時に必要となる力を育成するものとなっているのだろうか。推計や調査データから予測する。

## 生徒が社会に出る頃、社会はどうなっているか？

図1 GDP世界ランキング 悲観予測の場合

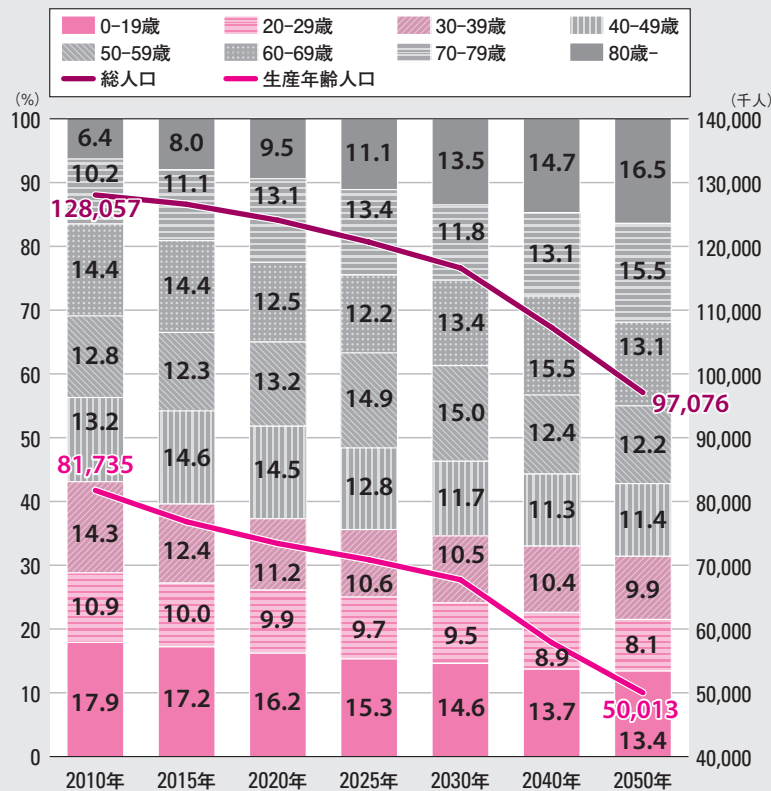
	2010年		2030年		2050年	
1	アメリカ	13,800	中国	19,675	中国	24,497
2	中国	7,996	アメリカ	18,202	アメリカ	24,004
3	日本	4,085	インド	8,584	インド	14,406
4	インド	3,493	日本	3,803	ブラジル	3,841
5	ドイツ	2,800	ブラジル	3,014	ロシア	3,466
6	イギリス	2,087	ロシア	2,983	イギリス	3,229
7	フランス	2,025	ドイツ	2,965	ドイツ	3,080
8	ロシア	1,941	イギリス	2,619	フランス	3,022
9	ブラジル	1,897	フランス	2,444	日本	2,972
10	イタリア	1,708	メキシコ	1,969	インドネシア	2,687

(10億PPPドル)

\* 上記は、③悲観(財政悪化による成長率下振れ)の予測。他に、①基本1(生産性先進国平均並み)、②基本2(「失われた20年」継続)、④労働力率改善(女性労働力率スウェーデン並み)がある

出典／一般社団法人日本経済団体連合会21世紀政策研究所グローバルJAPAN特別委員会「グローバルJAPAN-2050年シミュレーションと総合戦略」(2012年4月)

図2 日本の将来推計人口と年齢構成



\* 出生中位(死亡中位)推計による

出典／国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(2012年1月推計)

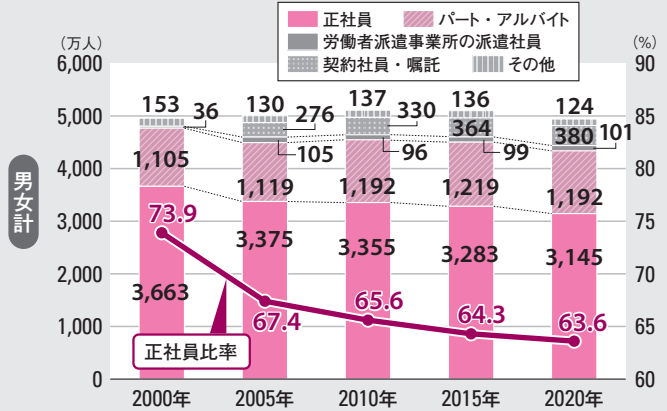
# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図5 グローバル人材育成を中心とした政府の施策

2014年 から	<p><b>スーパーグローバルハイスクール事業開始<sup>②</sup></b> 2018年までの指定で50校程度整備。海外大学の進学も視野に入れた教育を行い、グローバルリーダーの育成を図る</p> <p><b>スーパープロフェッショナルハイスクール事業開始<sup>③</sup></b> 5年一貫で専門的職業人の育成を目指す専門高校を指定し実践研究を行う</p> <p><b>高校段階での海外留学の拡充<sup>④</sup></b> 長期留学(原則1年間)は300人、短期留学(原則2週間以上1年未満)は新規で1,300人を資金援助</p> <p><b>スーパーグローバル大学30校整備<sup>⑤</sup></b> 外国人教員の積極採用、海外大学との連携など国際化を推進する大学を重点的に支援</p>
2017年 まで	<p><b>高校段階での英語力を、適正に評価する大学入試制度改革<sup>⑥</sup></b></p>
2018年 まで	<p><b>国際バカロレア資格を取得可能な高校を全国で200校整備<sup>⑦</sup></b></p>
2020年 まで	<p><b>海外からの留学生受け入れを30万人に<sup>⑧</sup></b> (2012年5月時点約14万人)</p>
時期未定	<p><b>大学入試の抜本改革<sup>⑨</sup></b> 大学入試センター試験を廃止し、「達成度テスト」(仮称)にする。教科学力以外の「多面的な学力」を問う方向への転換</p>

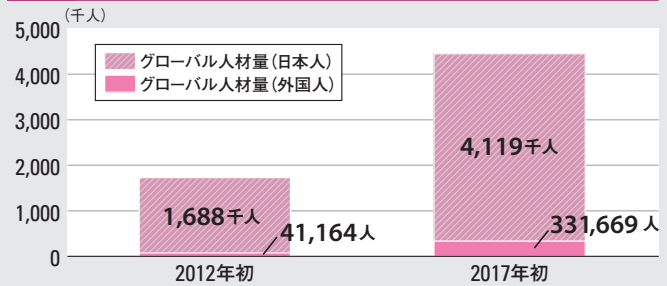
参考資料／<sup>②</sup>文部科学省「平成26年度予算案」(2013年12月)、<sup>③</sup>文部科学省「第2期教育振興基本計画」(2013年6月)、<sup>④</sup>日本経済再生本部「日本再興戦略」(2013年6月)、<sup>⑤</sup>文部科学省他「留学生30万人計画」(2008年)、<sup>⑥</sup>教育再生実行会議「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について(第四次提言)」(2013年10月)

図3 雇用形態別就業者数の推移



\*正社員比率は、役員を除いた雇用者に対する正社員の比率  
\*2000年において、「契約社員・嘱託」はその他に含まれる  
出典／リクルートワークス研究所「2020年の『働く』を展望する 成熟期のパラダイムシフト」(2011年10月)

図4 グローバル人材需要量の将来推計値



\*企業アンケートの調査票において「グローバル人材」とは、以下の①②③の全てに該当する者とした。①現在の業務において他の国籍の人と意思疎通を行う必要がある ②①の意思疎通を英語で(あるいは母国語以外の言語で)行う必要がある ③ホワイトカラー職(現行の日本標準職業分類における大分類A~D[管理的職業従事者、専門的・技術的職業従事者、事務従事者、販売従事者]を指す)の常用雇用者である  
出典／経済産業省調査事業「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」(2012年3月)

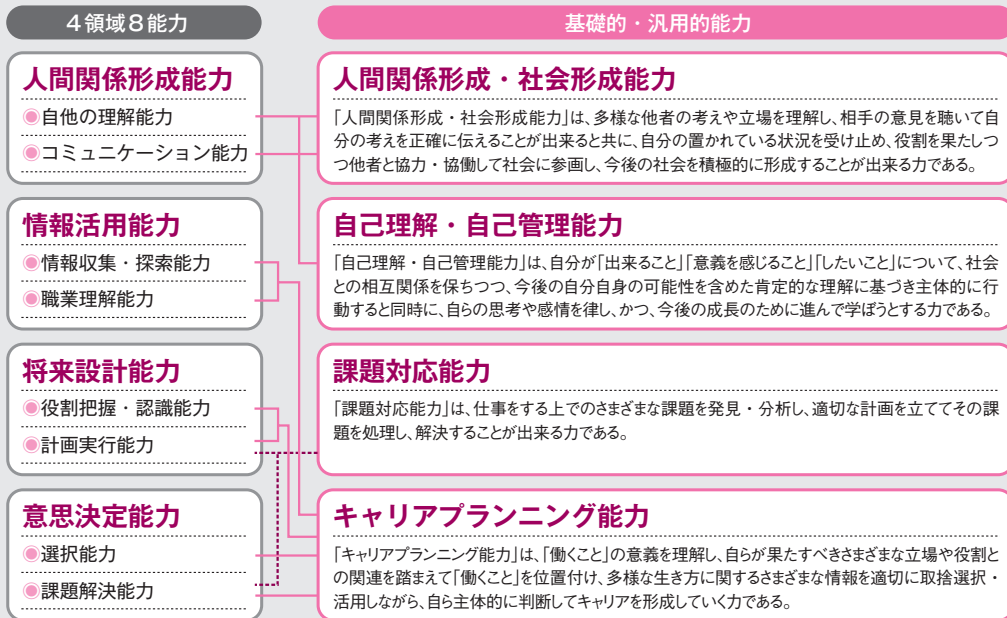
まず今後の日本社会の状況をデータで見えていく。日本のGDP(国内総生産)は世界3位だ(図1)。今後、世界経済の中で日本の位置は低下し、2050年までに9位になるという予測もある。一方、現在約1億3千万人の日本の総人口は50年には1億人を割り、その3割が70歳以上になると推計される(図2)。生産年齢人口も減少し、現在の約8千万人から6割程度となる。生徒はこれからも経済的な成長実感の持てない社会で生き、社会保障に掛かる負担が大きくなると考えられる。

労働形態では、「正社員」が徐々に減少しそうだ(図3)。この現象は景気の後退と併せて否定的に捉えられがちだが、専門技能を生かしてフリーで働きたい人やノマドワーカー(\*)、起業志向の人にとっては必ずしもマイナスではない。また、世界経済のパワーシフトと呼び、「グローバル人材」のニーズも急増する。経済産業省の予測では、生徒が大学生になる時点で、そのニーズは約412万人(図4)。日本の生産年齢人口が約8千万人なので、約20人に1人が「グローバル人材」となる。日本にいても海外にいても、多様な価値観を持つ人と一緒に仕事をする機会が、今以上に増えると考えられる。

これらの社会変化を踏まえ、国はさまざまな教育改革を計画している(図5)。中学校のキャリア教育で留意すべきは、高校選択の

\*IT機器を用いて、自宅やオフィスだけではない場所で仕事をする人

図6 基礎的・汎用的能力の内容

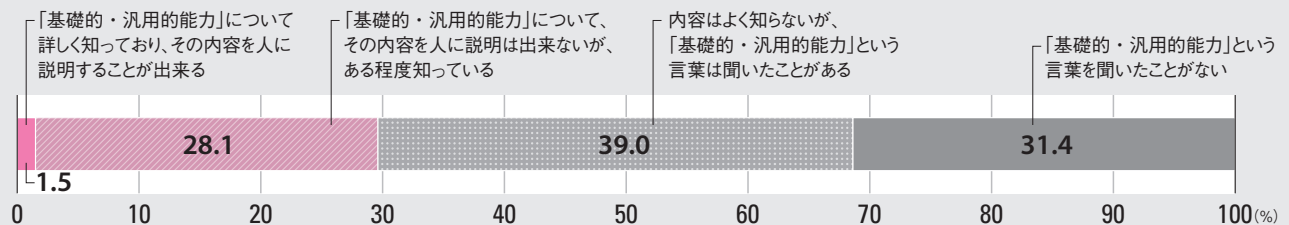


これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめたものである。この4つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力を全ての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。

これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては、この4つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体的能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。その際、初等中等教育の学校では、新しい学習指導要領を踏まえて育成されるべきである。(答申第1章3(2)③)

\* 図中の破線は、両者の関係性が相対的に見て弱いことを示している。「計画実行能力」「課題解決能力」という「ラベル」からは「課題対応能力」と密接なつながりが連想されるが、能力の説明等までを視野に収めた場合、「4領域8能力」では、「基礎的・汎用的能力」における「課題対応能力」に相当する能力について、必ずしも前面に出されてはなかったことが分かる  
出典/国立教育政策研究所「キャリア教育を創る—学校の特色を生かして実践するキャリア教育」

図7 「基礎的・汎用的能力」についての認識



重みがこれまで以上に増す点だ。海外進学を視野に入れるか、地域に密着した産業を通じて生きていくか。自分の適性や志望、更に社会状況を見据えながら考える必要がある。柔軟に自らのキャリアを考え、設計していく能力が、今まで以上に重要になるだろう。

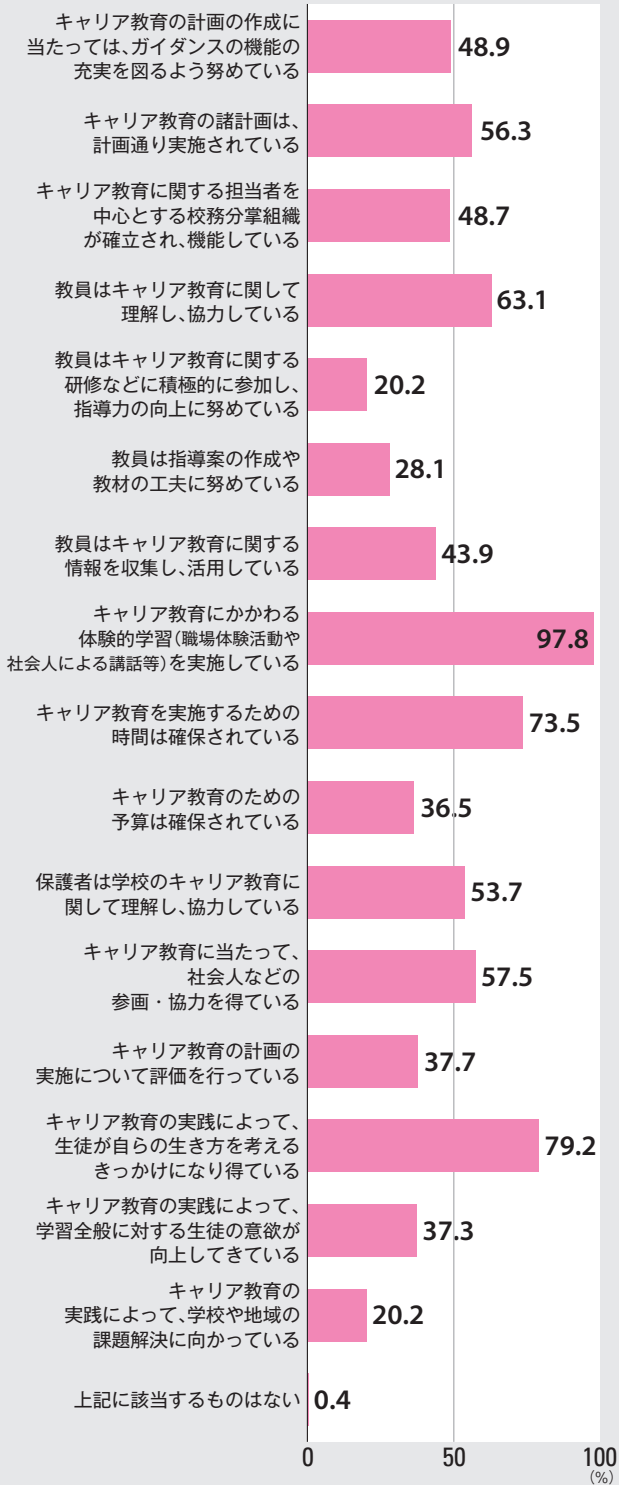
それではキャリア教育の現状はどうか。11年の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)では、今後の社会で必要となる力として、これまでの「4領域8能力」を「基礎的・汎用的能力」に再構成した(図6)。社会の変化や必要とされる人材に対応し、国のキャリア教育のあり方も再整理されたと考えられる。しかし、この基礎的・汎用的能力を「知っている」中学校教員は3割にも満たない(図7)。更に、キャリア教育の計画を立てる際、「職場体験」「社会人講話」などは9割近くが重視するが、活動と「基礎的・汎用的能力」の関連性を考えたり、生徒に身に付けさせた目標を設定したりする割合は低い(図8)。教師は、キャリア教育を通して生徒がどう変化していると捉えているのか。図9を見ると、「生き方を考えるきっかけ」にはなっているが、「学習意欲の向上」にはあまり結び付いていない様子がうかがえる。

キャリア教育はどのような視点で教育活動に生かせるものなのか。9ページから各校の事例を見ていきたい。



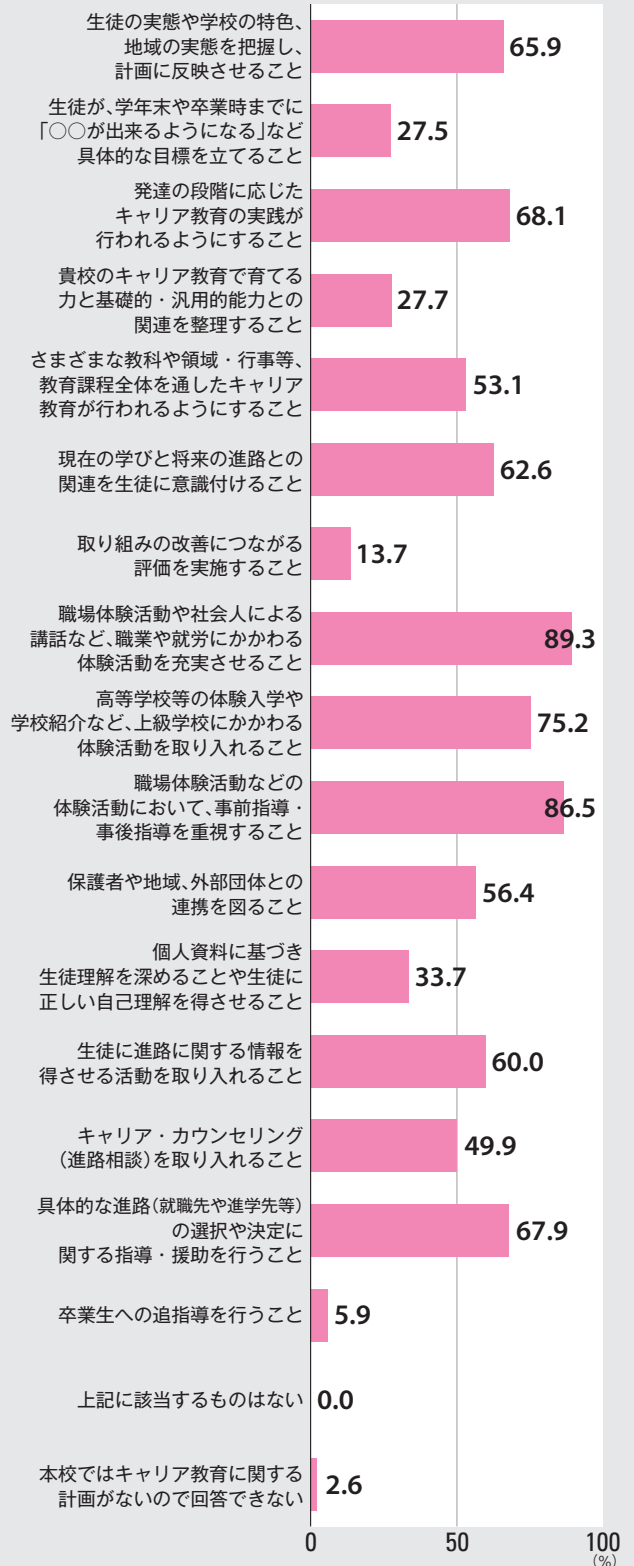
# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図9 自校のキャリア教育の現状



\*「そのとおりである」と思うものを全て選択

図8 キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと



\*当てはまるものを全て選択

図7~9出典/国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」(2013年3月)

## 授業

を通して

- 基礎的・汎用的能力を育成する視点で授業を見直し、それらの育成を意識する  
東京都荒川区立諏訪台中学校 ▶ P.9
- 課題を自分のものとして考えられるように、「S=立ち位置」を意識させた授業づくりを行う  
大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校 ▶ P.18

## 進路指導

を通して

- 地域や企業の協力を得てゲストティーチャーを招いたり、職場体験の派遣先を抽選で決めたりして、視野を広げさせる  
東京都荒川区立諏訪台中学校 ▶ P.9
- 「ドリカムカード」で3年間の活動をたどり、内面を掘り下げてから志望を焦点化させる  
愛知県名古屋市立千鳥丘中学校 ▶ P.14

# 社会を 生きる力を 育む

- 職場体験での気づきを学校生活にフィードバックできるような事前・事後指導を行う  
東京都荒川区立諏訪台中学校 ▶ P.9
- 「ドリームマップ<sup>®</sup>」を活用し、将来の目標を意識させてから、職場体験を行う  
愛知県名古屋市立千鳥丘中学校 ▶ P.14

- 「いとみらい科」で学校や地域とかがわる活動を行い、社会参画力を育む  
大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校 ▶ P.18
- 小中連携をし、9年間で段階的に将来観や就労観を身に付け、基礎的・汎用的能力を育てる  
大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校 ▶ P.18

## 職場体験

を通して

## 総合的な学習の時間・ 道徳・特別活動

を通して

## キャリア教育の充実に向けて

- 職場体験を「キャリア教育のスタート」と捉え、恒例行事化を防ぐ
- 他者や社会との関係の中で、自己実現を考えさせる
- 志望校合格や進路決定を、ゴールではなく、1つのステップとして考える
- 教師自身が社会人として常に自分を磨く意欲を持つ

対談 ▶ P.22

# 授業をキャリア教育の視点で改善し、社会で生きる力を育む

## 東京都 荒川区立諏訪台中学校

荒川区立諏訪台中学校は、キャリア教育はあらゆる教育活動で行うものと位置付ける。中でも力を入れるのが、授業をキャリア教育の視点で見直し、指導の質を高めることだ。生徒が身に付けるべき力とその手段を明確にし、生徒の理解度や教師の指導力の向上を目指している。

### ●課題意識 若者たちの生きる力の 低下に危機感

荒川区立諏訪台中学校は、目指す学校像に「全教育活動をキャリア教育の視点で捉え、基礎的・汎用的能力を育成する学校」を掲げ、日々の教育活動の改善に取り組む。その背景には、若者の生きる力の低下に対する、清水隆彦校長の強い危機感がある。

「現在、日本には約63万人ものニートがいるといわれています。景気の影響もあると思いますが、もし教育に問題があり、チームで

仕事が出来ない、課題解決力が身に付いていないという人が数パーセントでもいるとすれば、それには義務教育段階での責任もあるのではないのでしょうか。子どもが人間関係を築く力や課題解決力を身に付けられるように、教育の中身を見直すべきだと思います」

更に、清水校長が指摘するのが子どもたちの学力の変化だ。TIMSSやPISA(\*1)のように数字に表れる学力は世界でも上位を維持しているが、「学習が楽しい」「学校での学習が将来の役に立つ」と答える子どもの割合は他国と比べて低い。

「今と変わらず、10年、20年前も私たち教

師はそれぞれ信念を持ち、一生懸命に指導を行っていました。しかし、現実には、大学卒業間際になっても何をしたいのかが分からない、将来の目標が持てないという学生がいます。キャリア教育の視点を授業にも取り入れて、生徒が意欲的に学び、社会で生きる力を育むことが急務だと考えています」

一方、幅広い学力層を抱えるという学校独自の課題もある。同校は15年前に4校が再編されて生まれた学校で、生徒の学力や気質、保護者の教育に対する期待はさまざまだ。

「ただ宿題を出す、家庭学習時間の目標を設定するだけでは、必ずしも生徒は学びに向

### School Data

◎1998(平成10)年に開校。2012年度からキャリア教育の改革に着手。夜間の補習授業「諏訪台てらこや」を週1回実施するなど、基礎学力の向上にも努める。学校新聞に定評があり、内閣総理大臣賞などを受賞。



校長◎清水隆彦先生

生徒数◎438人 学級数◎13学級

所在地◎〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 2-36-8

TEL◎03-3891-6115

URL◎<http://www.aen.arakawa.tokyo.jp/SUWADAI-J/>

公開研究会◎2014年11月(予定)

\*1 TIMSS…IEA 国際数学・理科教育動向調査、PISA…OECD 生徒の学習到達度調査

かいません。夢や希望を持ち、自分がどう生きていくのかというキャリアプランニング能力を身に付けることが、学ぶ意欲を加速させ、真の学力向上につながると考えています」

### ● 取り組みのねらい

## 基礎的・汎用的能力の観点で 授業内容を捉え直す

そうした課題意識の下、2012年度から、学校全体でキャリア教育の視点を取り入れた研究授業を年間15回以上行っている。13年度から2年間は「荒川区授業力向上プロジェクト事業研究指定校」となり、「社会人・職業人・地域人の育成」を目標に、授業改善を継続している。

取り組みの基本的な考え方は、キャリア教育で目指す「基礎的・汎用的能力の育成」という視点を授業に取り入れながら授業改善を行い、学力向上を図ることにある。

「キャリア教育」というと職場体験の実施などに目が向きがちですが、本来の目的は、キャリア形成の視点で全ての指導を捉えて、教育活動全体の質を高めていくことにあります。授業にキャリア教育の視点を取り入れるといっても、教科学習の要素を削るわけではなく、授業の理解度を高めるための授業改善の手法の1つとしてキャリア教育の視点を盛り込むのです。その結果、生徒の意欲や理解度が高まり、学力向上に結びつくことを最大の

目的としています」(清水校長)

研究授業では、授業を通じて身に付けたい力を焦点化するために、中央教育審議会で示された基礎的・汎用的能力に沿って、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」のいずれかを必ず盛り込む。それらを育成する手段として「人間関係形成能力」「ICT機器活用」「学校図書館活用」「外部人材活用」の4つの観点を設定し、これをマトリクスにして指導案に明示する(図1)。

### ● 授業に取り入れるキャリア教育の視点

## ICTの活用で 課題対応能力を高める

研究授業は年間15回以上行い、教師全員が必ず1回は授業を行う。例えば、1年生で研究授業を行う場合は、2・3年生の教師は分担して1年生の各教室に入り、該当の授業を参観する。そして、授業後には、指導案のマトリクスを見ながら、授業者と参観者が授業の良かった点、改善すべき点などについて意見を交換する。授業でどのように基礎的・汎用的能力を育成しているのか、4つの観点ごとに具体例を見ていく。

### ① 人間関係形成能力(協議型授業)

人間関係を構築する力の育成については、グループワークや発表を取り入れ、話し合い活動や討論型理科実験などを行う。例えば、



荒川区立誼訪台中学校校長  
**清水隆彦** しずみ たかひこ  
「先生方には、全ての生徒と一緒に考えられるような、良質の問いを授業で投げ掛けてほしい」



荒川区立誼訪台中学校  
研究主任。英語科担当。「授業では、どの生徒も分かりたいと願っていることを忘れずに指導したい」  
**山崎 聡** やまざき さとる

美術科では授業におけるキャリア教育の視点を、「色と形とイメージについて自分なりの考え方をもち、表現する力の育成」「作品を自分の価値観で鑑賞できる力の育成」と規定した。その上で、授業では色や形の効果を理解しながら言葉や作品で表現したり、作品から受けるイメージを批評的な視点で発表・記述したりする活動を行い、人間関係形成能力や言語力・表現力の向上を図っている。

### ② ICT機器活用

電子黒板やタブレットPCを活用し、授業内容の理解度の向上と、ICT活用能力の向上を図る。例えば、体育科の跳び箱の授業では、タブレットPCで模範演技を見せた後、生徒が跳んでいる様子を撮影し、教師と一緒に動画を見ながら改善点をチェックした。このようにして、自己理解・自己管理能力や課題対応能力を育てようとしている。

英語科では、生徒がインターネットで英文法の解説サイトを探してノートにまとめる調

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図1 基礎的・汎用的能力育成に関する手段と目的のマトリクス(例)

## 英語科学習指導案 1年生

### 1 教材・単元名

省略

### 2 単元の目標

- 好きなことの紹介の仕方を知る
- have / like / playなどを理解し、使う
- 好きなものや好きなことについて説明する

### 3 キャリア教育の観点

「人間関係形成・社会形成能力」は「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることが出来ると共に、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することが出来る力である」と定義されている。英語の授業では、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等の育成を意識して指導している。

グループ	授業の手段			
	人間関係形成能力 (協議型授業)	ICT機器活用授業 (電子黒板、 タブレット活用授業)	学校図書館活用授業 (学校図書館活用授業)	外部人材活用授業 (教科、キャリア専門家)
基礎的・ 汎用的能力				
目的				
人間関係形成・ 社会形成能力	○ 相談、発表活動			○ ALT
自己理解・ 自己管理能力	○ 発表活動		○ 資料選定	
課題対応能力	○ 発表活動	○ ICT機器での例示	○ 発表活動	
キャリア プランニング能力				

### 「基礎的・汎用的能力の育成」に特に関連する外国語(英語)科の指導内容

言語活動 としての話題	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
自分の気持ちや身の 回りの出来事などの 中から、簡単な表現 を用いてコミュニ ケーションを図れる ような話題を取り上 げる	《聞くこと》 ・まとまりのある英語を 聞いて、概要や要点を 適切に聞き取ること 《話すこと》 ・聞いたり読んだりした ことなどについて、問答 したり意見を述べ合っ たりすること	《聞くこと》 ・質問や依頼などを聞 いて適切に応じること 《話すこと》 ・伝言や手紙などの文 章から書き手の意向を 理解し、適切に応じる こと	《話すこと》 ・与えられたテーマに ついて簡単なスピーチ をすること ・つなぎ言葉を用いる など工夫をいろいろし て、話を続けること	《読むこと》 ・書かれた内容や考え 方などを捉えること 《書くこと》 ・感想、賛否やその理 由を書いたりすること ・聞いたり読んだりした ことなどについて、自分 の考えや気持ちを書く こと

※文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』より

\*同校の資料を基に編集部で作成

べ学習、文書作成ソフトやプレゼンテーショ  
ンソフトのスペルチェック機能を利用して、  
より正確な英文を作る練習などに活用した。  
研究主任の山崎聡先生は効果をこう話す。  
「手書きでは教師は三単現のSを直すだけ  
で手一杯で、単語の間違いまで直されませ  
んでした。パソコンを利用することで、より  
正確な英文を効率的に学ばせることが出来た

「膨大な本や資料の中から  
「調べ込む経験」も大切  
③学校図書館の活用  
学校図書館の利用は、同校が最も力を入  
る取り組みの1つだ(写真1・2)。英語科で  
は、図書館で好きな本を選び、英語で紹介す  
る



写真1 図書館では、学校図書館司書を中心に図書の並べ方や書籍の紹介、室内レイアウトなどを工夫して生徒の活用を促している。年間利用者は3年間で、延べ1万2000人から1万6000人に増えた

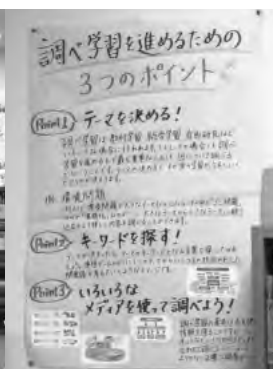


写真2 図書館には、「調べ学習を進めるための3つのポイント」が掲げられている

る活動を行う。学校図書館司書と教科担当が  
協同して書籍での調べ学習を行う「コラボ  
レーション授業」も各教科で行われている。  
「情報活用能力を高めるには、インターネッ  
トを活用するだけでなく、『調べ込む経験』  
が重要だと考えます。インターネットで検索  
してばつと情報を得るのと、膨大な文献資料  
の中から自分で必要な情報を探し出す作業は  
全く違います。同じ情報にたどり着くとして

も、本を読みながら調べるといふプロセスそのものが、社会人に必要な情報活用力を育むのではないでしょうか」(清水校長)

例えば、世界の気象状況を調べる時、気象に関する本を片っ端から探してみる。答えは見つからなくても、次に何を調べればよいのかを考え、仲間と協同して調べ、物事を掘り下げていく体験は、単なる情報活用能力にとどまらない知の探究へと生徒を誘う。

#### ④外部人材の活用

TA(\*2)や地域の協力を得て行う授業も頻繁に行う。例えば、英語科では大学生のTAを3人入れ、ALTと合わせて5人で授業を行ったり、理科ではゲスト・ティーチャーを招いて実験を行ったりしている。地域や社会、産業界と連携し、生徒に世の中の実態を伝え、学校での学びや進路選択への気付きを与えようとしている。

「授業の手段としたこれらの4つの観点は、部分的には多くの学校で行われていると思います。ただ、大切なのは、これらがキャリア教育の視点になると意識して授業を見直すことだと考えています」(清水校長)

#### ●職場体験の工夫

### 勤労留学を学校生活の改善に結び付ける

授業におけるキャリア教育のほかには、勤労留学(職場体験)や校内ハローワーク(職

業人講話)を実施している。いずれの取り組みも、仕事内容を知ることが主目的としていないのが、同校の特徴だ。

5日間の勤労留学では、仕事の中身だけでなく、働くことの大変さ、社会人として身に付けておきたい力を実感させることをねらいとしている。「約束通り仕事が出来なければ厳しい指導を受ける」「単に話すのではなく相手に分かるように伝える」といった体験を通して、社会の一端を知る。それらの経験を学校生活に結び付け、今、何を努力し、生活をどう見直すべきかを考えさせるのが最終的な目的だと、清水校長は語る。

「体験先の上司が言うことや働く上でのルールが、実は学校の先生が話す内容と同じであることに気付く生徒もいます。社会で求められることと、学校生活で求められることは実はつながっている。そこに気付き、日々の学校生活を大切にしようとする気持ちが大きくなることを期待しています」

勤労留学で重要なのが、事前事後の指導だ。単に「良かった」「出来なかった」という感想ではなく、勤労留学でどのような気付きがあったのか、何を学んだのかを、生徒が焦点化することこそが必要と考える。そのため、勤労留学前には、キャリア・コーディネーターによるマナー研修を行い、事後は振り返りの作文を書くほか、三者面談を行う。勤労留学で気付いたことを担任や保護者と話し合い、

そこで得た体験を日常生活にフィードバックできるように意識化させている。

### 校内ハローワークで働くことへの視野を広げる

ゲスト講師を招いて自分の仕事について語ってもらう「校内ハローワーク」も、趣旨は勤労留学と同じだ。話の内容は、仕事の中身が半分ほどで、中心となるのは仕事のやりがいや、中学校時代に頑張っておきたいことだ。「約束の時間に1分でも遅れると仕事はなくなることもある。学校の宿題も1日くらいなら遅れてもよいという考えは、社会では通用しない」。そうした話を社会人から聞くことで、学校生活の意味を再確認する。

勤労留学や校内ハローワークでは、生徒が知らない職業と出合い、視野を広げることも重視する。13年度の校内ハローワークでは、弁護士や医師、企業経営者、新聞記者など幅広い業種の講師を招いて30講座を設けた。生徒は1人3講座を受講するが、生徒自身が選べるのは1講座で、あとの2つは抽選で決まる。今はまだ興味がない、または知らない仕事に就く人の話を聞いて、視野を広げると共に、どのような仕事にもやりがいがあることを生徒に感じてもらいたいからだ(図2)。

例えば、女子生徒がプロ野球関係者の話を聞きにいき、男性の仕事であると思っていた職場に、女性が多く進出していることを知る

\*2 Teaching Assistant の略

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図2 校内ハローワークを受講した感想

- **機械エンジニア受講** (3年生女子) …「機械エンジニア」という意味も知りませんでした。私は機械を触るのも苦手で、機械に興味がなかったのですが、今回の話を聞いて、「機械エンジニア」の素晴らしさが分かりました。
- **会社経営受講** (3年生男子) …社長さんのイメージが変わりました。物事を判断することが大事だということが分かりました。社長はただ偉そうにしているのではなく、社員の方をしっかりとめる大変な仕事だと分かりました。
- **映像ディレクター受講** (1年生女子) …映像は、人の心を動かせるものだと分かりました。人を喜ばせることや、作品を「一生の宝物」と言われてみたいと思いました。
- **クッキーソムリエ受講** (1年生女子) …母も同じことを言っていました。食事は自分のために作ろうと思うとあまりおいしく作れない。人のためにおいしく思っていることが大切だと分かりました。
- **ライター受講** (3年生男子) …いろいろ「やってみる」ことの大切さ、「人との出会い」を大切にすること、プラス、マイナスがあっても「自分の可能性」を信じてこれからも頑張りたいと思いました。

\*同校の資料を基に編集部で作成

「この取り組みは社会形成能力の育成につながる」「課題対応能力が高まっている」など、キャリア教育に関する内容が話題に上るようになった。同校では、文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』を教師一人ひとりに配布

した。付せんやマークカードだらけになるほど読み込む教師もいるという。研究授業以外の普段の授業も変わりつつある。グループワークやタブレットPCを活用し、人間関係形成能力や課題対応能力の向上に努める教師が増えており、清水校長も「今までの授業とは構成が変わりつつあることを肌で感じています」と評価する。

キャリア教育の改革により、生徒の意識に変化が表れつつある。毎年実施する荒川区の生徒アンケートでは、意欲的に学ぶ姿勢が徐々に身に付いているという結果が出ている。また、「マーケティングの仕事をしたい」というように、将来の夢に具体的な仕事内容を掲げる生徒も現れ始めている。「この先、希望は変わるかもしれませんが、一時でも広い視野を持つことは、その後の進路選択においてプラスになるでしょう」と清水校長は評価する。

「キャリア教育の成果はすぐ目に見えるような形で表れるものばかりではありません。キャリアの視点を取り入れて授業が変わり、それによって少しでも生徒が授業を理解できるようにになれば、それだけでも大きな成果でしょう。本校でも全ての先生の授業が変わったといえるところまでは進んでいません。更にキャリア教育の意義を浸透させ、教育の質を高める努力を続けていきます」(清水校長)

こともある。抽選で仕事を選ぶのは勤労留学も部分的には同じで、女子生徒が旋盤工場に行って職人と一緒に働くこともあるという。勤労留学や校内ハローワークを効果的な活動にするポイントの1つは、キャリア・コーディネーターの活用にあるという。13年度の校内ハローワークでは、コーディネーターの協力を得て多様な業種の講師を招くことが出来た。ただ、取り組みはあくまで学校主導で行うべきだと、清水校長は強調する。

「プロの力を借りる時、往々にして全てを任せてしまうことが学校ではよくあると思います。しかし、プロは、あくまで学校を支援する立場であり、教師が主体となって取り組まなければなりません。また、コーディネーターが学校に来ることは、教師の研修にもなると考えています。各業界のプロとの協同作業を通して、表現や指導の仕方、話しぶりなど学ぶべきことがたくさんあるはずですよ」

## ● 成果と課題

### キャリア教育の視点が日常の教育活動にも浸透

現場の変化は教師自身も実感している。「英語科では、以前から生徒同士の学び合いを大切にしてきましたが、『英語を通じてどんな人を育てたいのか』という視点で授業を組み立てるようになりました。また、勤労留学の受け入れをお願いする際は、ただリストの上から順に電話を掛けるのではなく、実際に教師が出向いて一社一社交渉に当たりました。最初は緊張しましたが、向き合って話をする中で取り組みの趣旨を理解していただくことができ、私たちの社会性も高まったのを感じます」(山崎先生)

# 1年生から将来を考えさせ 目標を持って今をしつかり進む

## 愛知県 名古屋市立千鳥丘中学校

名古屋市立千鳥丘中学校は、かつて生徒指導に多くの課題を抱えていたが、キャリア教育に力を入れ始めてから徐々に落ち着きを取り戻した。現在は、3年生2学期からのキャリア教育の充実に着手。志望校を探すだけの進路指導にとどまらない「生き方指導」を追求する。

### ● 課題意識

#### 生徒指導や保護者対応で 募る教師の疲弊感

名古屋市立千鳥丘中学校は、名古屋市東南に位置する緑区北部の住宅街にある中規模校だ。生徒は落ち着いてのびのびと学校生活を送っているが、数年前までは近隣校の中でも生徒指導が厳しいといわれる学校だった。連日のように、生徒の問題行動が起こり、そうした生徒から身を守るように、他の生徒はひっそり学校生活を送っていた。保護者から理不尽な意見を寄せられることもあり、教師

は生徒と保護者双方の対応に追われる状況が続いていたという。

2010年度に赴任した清水克博校長は、そうした生徒の校則違反や保護者の理不尽な要求には毅然とした態度で臨む方針を明確にした。併せて、改革の柱にしたのがキャリア教育だった。

「本校の校訓は『集・学・伸』ですが、当時の生徒は『集う』のではなく『群れる』の状態でした。同じ目的の下に集う集団にするためには、生徒指導だけではなく、キャリア教育を充実させ、生徒が夢や目標を持つことが必要だと考えました」（清水校長）

### School Data

◎ 1974（昭和49）年に名古屋市立鳴海中学校分校として設立。「集・学・伸」を校訓として、主体的に考えて行動する生徒の育成を目指す。校名は、校区にある松尾芭蕉生前唯一の建立句碑「千鳥塚」に由来する。



校長◎ 清水克博先生

生徒数◎ 352人 学級数◎ 11学級（うち特別支援学級1）

所在地◎ 〒458-0801 愛知県名古屋市緑区鳴海町字山ノ神 108

TEL◎ 052-891-8601

URL◎ <http://www.chidorigaoka-j.nagoya-c.ed.jp/>

公開研究会◎ 未定

### ● 職場訪問・職場体験の改善

#### 「ドリームマップ®」で夢を可視化 その上で訪問先を選択

改革では、まず1年生の職場訪問、2年生での職場体験の改善に着手した。

11年11月、1年生は、職場訪問の事前学習で「ドリームマップ®」づくりに取り組んだ。これは、自分の夢を文章や写真などを使って台紙に表現し、漠然と描いている夢を視覚化するというもの。生徒に、目標を持って生活する大切さに気付いてほしいというねらいがある。そして、その夢に関連する事業所を訪



# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

問し、職業人に話を聞き、一人ひとりがレポートにまとめる。事後には職場訪問発表会を開き、レポートの内容を生徒間で共有する。

ドリウムマップ®作成時には、一般社団法人ドリウムマップ普及協会から講師を招き、指導に当たってもらった。教師に負担が掛かりすぎないように、清水校長の方針として可能な限り外部人材を活用している。

「教育活動は継続性が大切です。これなら出来そうだと見通しを持ってもらうためにも、外部の力を活用し、なるべく教師の負担を減らすようにしています。1つでも新しい取り組みが定着すれば、先生方は達成感が得られますし、生徒のためにもっと頑張ろうという思いも高まります。それが次の取り組みにつながると思っています」（清水校長）

2年生の職場体験でも、事前事後の指導を徹底する。プロの講師を招いたマナー講習会後、3日間の職場体験を行い、事後は礼状の送付、レポート作成、発表会を行う。

職場訪問・職場体験のいずれも、生徒は事業所一覧から第4希望までを選び、志望理由を書く。将来なりたい職業に直結する訪問先に決まる生徒はごく少数だ。第2、第3希望に決まる生徒もいれば、一覧表に希望する職業がない場合もある。3学年主任の佐藤愛先生は次のように説明する。

「実社会では、自分の思い通りの仕事に就けるとは限りません。希望と異なる職種でも、

一生懸命に取り組むことによって、新しい発見があったり、自分に足りないところに気付いたりして、自分を磨こうとする意識が芽生えることを期待しています」

事後のレポートでは、体験した内容だけでなく、訪問先で学んだこと、大切だと思ったことを書く生徒が目立つという。

## ●「ドリカムカード」の取り組み

### 学校生活の軌跡をカードにまとめてファイリング

次に着手したのは、3年生のキャリア教育だ。それは、現3年生の気質とも関係している。同学年は入学時から問題行動が少なく、明るく元気な生徒が多い半面、特に男子生徒に精神的に幼い傾向が見られた。進路指導主事の清水亮先生はこう話す。

「現3年生は仲が良く、学校行事ではクラス一体となって頑張り、力を発揮します。学校生活では友だちと一緒に同じ目標に向かって頑張れるのですが、いざ進路に向けて一歩を踏み出すとなると、自分が何をしたいのか、どの方向に進めばよいのか分からない生徒が目立ちました。集団で培ってきた力を、自身の進路を切り開く力に換えられるように、教師が後押しする必要があります」

そこで、13年度、3年生2学期に始めたのが「Dreams Come True Card」（以下、ドリカムカード）だ。これまでの進路学習や学習



名古屋市長千鳥丘中学校校長  
**清水克博** しみず・かつひろ  
「実践に基づいた確かな自信を生徒が持つよう、学校づくりを行っている」



名古屋市長千鳥丘中学校  
進路指導主事。数学科担当。「生徒がきちんと目的を持って進路選択が出来るよう心掛けて指導している」  
**佐藤 愛** さとう・あい  
3学年主任。社会科担当。「努力する者夢を語る」。一緒に夢を語る生徒を育てていきたい」



名古屋市長千鳥丘中学校  
進路指導主事。数学科担当。「生徒がきちんと目的を持って進路選択が出来るよう心掛けて指導している」  
**清水 亮** しみず・りょう

の軌跡を振り返るため、志望校の志望理由や自己プロフィール、進路講演会、体験入学の振り返りなどを記入し、ファイリングしたポートフォリオだ。

「目的意識を明確に持ち、そこに向かって努力した生徒は、思い描いた通りの環境ではなくても、新たな目標を見つけて頑張ることが出来るでしょう。一方で、『どこかに行けばよい』という気持ちで進路を決めた生徒は、第1志望校に入学しても、モチベーションの維持が難しいのではないかと思います。ポートフォリオにこれまでの経験とそこで考えたことを書き出し、自分の成長を客観的に見つめさせることによって、選択のプロセスを強く意識させ、自分の意思で進路先を選択・決定させようと考えました」（佐藤先生）



## 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

### 「学校生活を振り返り 「根拠のある自信」を育む

ドリカムカードの利点は、生徒が自身の活動の軌跡を振り返り、志望を焦点化できることにある。また、教師にとっても、進路希望調査に記された志望校名だけではくみ取るのが難しい生徒の意思や、選択の根拠を知り手掛かりになる。ドリカムカードの記述を踏まえて教育相談や保護者会を繰り返し行ったところ、家が近いという理由だけで志望校を選んでいた生徒が、徐々に自分の可能性に目を向け、志望校を変更し、高校卒業後の姿を思い描いた選択をするようになった。

このように、ドリカムカードの重要な役割の1つは、進路に向かって一步を踏み出す自信と勇気を与えることにある。

「キャリア教育の目標は、目指す学校に入る、将来なりたい職業を見つけることだけではありません。不確実な世の中で、たくましく生き抜いていく力を付けることこそが真の目標です。そのためには、何よりも生徒が『自分なら出来る』という自信を持つことが重要です。ただし、それは『根拠のある自信』でなければなりません。うぬぼれではなく、自分は今ここまで頑張ったから大丈夫だという体験があれば、この先、つまづくことがあっても、努力すれば次はうまくいくと考えられ、挑戦し続けることが出来るのではないでしょう

うか」（清水校長）

体育大会や合唱コンクールなどの行事後に、「自分が得たもの、皆のために自分が出来たこと」を考えさせるのもそのためだ。行事を通して自分の成長を自覚させることによつて、生徒は自己肯定感を高め、自信を持つて志望動機や自己PRを書くことが出来る。

自分が何が出来たのかに気付いていない生徒には、教師がそつと背中を押す。「昨年の合唱コンクールでは、皆のために頑張れたよね」「体育大会の振り返りで、人の役に立てることが分かったって書いていたね」と声を掛けることで、生徒はきっかけをつかみ、滞っていた筆がすらすらと動き始める。教師の一言が、生徒の過去・現在・未来をつなぎ、進路に向けて力強く歩み始める勇気を与える。

#### ● 成果と課題

### 出口を探す指導から 生き方を考える指導へ

キャリア教育の推進は教師自身が学ぶことも多かったと、佐藤先生は振り返る。その1つは、キャリア教育が決して特別な取り組みではないと認識を新たにしたことだ。

「ドリカムカードを作成して気付いたのは、これまでの取り組みを整理することでキャリア教育は十分行えることです。どの学校、どの学年でも行える『普通の取り組み』であることが、汎用し、定着するためには大切な

です。3年前、進路指導主事を務めていた時には、キャリア教育について、そこまで研究できていませんでした。しかし、これまでの取り組みをキャリア教育の視点から見ると、自分の指導に一本筋を通すことが出来たと感じています」（佐藤先生）

2つめは、キャリア教育の再構築が進路指導について考え直す機会になったことだ。以前は、生徒のために進学先を確保することに力を入れるあまり、必ずしも高校入学後や高校卒業後、社会人となった時のことまでを深く考えた指導にはなっていなかった。

「生徒や保護者と時間を掛けて話し合っただけで志望校にもかわらず退学してしまう生徒を見て、自分の指導は本当に良かったのかという反省もありました。キャリア教育を体系化することで、生徒の内面をくみ取りながら、その生徒が3年間をどんな環境で過ごすかを見通し、きめ細かな進路指導が出来るようになってきたと思います」（佐藤先生）

このような広い視野を持った教師を更に増やさなければならぬと、清水校長は語る。

「キャリア教育を実のあるものにするためには、教師自身が幅広い視野を持っていることが大切です。学校外の人材との交流や外部研修の機会などを増やし、そうした体験を通して教師自身が社会を知り、視野を広げていくことで、本校のキャリア教育も次のステップへ進めたいと思います」

# 9年間の「いまとみらい科」で 将来に結び付く社会参画力を育む

## 大阪府 ゆめみらい学園 高槻市立第四中学校

高槻市立第四中学校は、2010年度から校区内の2つの小学校と連携し、「社会参画力」を育む9年一貫のキャリア教育を行う。生徒に「なぜ学ぶのか」「課題と自分はどうつながっているのか」を徹底的に問い掛け、自ら学ぶ意欲を引き出している。

### ●9年一貫教育の背景

#### 「学びの空洞化」が 校区の子どもの課題

「授業はどうですか」「テストは難しいですか」と好奇心に満ちた目で問い掛ける小学6年生に、中学1年生が「すぐ仲良くなれるよ」「ノートはこうやってまとめるんだよ」と丁寧に答える――。これは、高槻市立第四中学校の校区にある赤大路小学校と富田小学校の6年生が、10月の3日間、中学校に体験入学した時の様子だ。この企画・運営は、2010年度から3校が連携して行う「いま

とみらい科」の中学1年生「学校温度計をあげよう⑦」の単元で生徒が自ら行った(図1)。同校は、2つの小学校と共に、10年度に文部科学省「研究開発学校」、高槻市の連携型小中一貫教育推進モデル校となり、小中一貫教育の研究を進めている。1980年代半ばに同校の高校進学率が低下した際、地域の幼稚園や高校も加わり「学力保障プロジェクト」が発足し、地域全体で進路保障・学力保障に取り組んできた。05年には、この活動が「四校区教育連携会議 つなぬく」に発展し、「0歳から18歳まで」を合言葉にキャリア教育と授業改善を推進し、進路保障を進めてい

る。この20年余りの連携の歴史が、小中一貫教育の研究の土台になっている。研究に当たり、まず3校の教職員が集まり、校区の子どもの実態を話し合った。挙がった課題は、学校での学習内容に必然性を感じられない「内容のずれ」、学習方法が効果的ではない「学び方のずれ」、自信や意欲が低下し主体的に学べない「気持ちのずれ」だ。この3つを「学びの空洞化」と名付けた。次に、子どもにどんな力を育みたいかを話し合い、①じりつする力(自分で判断しながら自分の立ち位置を見つめる力)、②考える力(課題解決に向けて必要な情報を整理・活

### School Data

◎1947(昭和22)年、富田町立中学校として開校。1957年現校名に改称。学校教育目標は「人権を大切にし、たくましく生きる、心豊かな生徒の育成」。2010年度から赤大路小学校、富田小学校と連携型小中一貫教育を行う。



校長◎沖田厚志先生

生徒数◎295人 学級数◎13学級(うち特別支援学級4)

所在地◎〒569-1144 大阪府高槻市大畑町4-4

TEL◎072-695-0404

URL◎<http://www.takatsuki-osk.ed.jp/jhs-04/>

公開研究会◎未定

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図1 「いまとみらい科」単元一覧表(1~3年生分抜粋)

	学校		地域・社会	
	いま・みらい	いま	みらい	みらい
1年生 50時間	学校温度計をあげよう⑦ Welcome四中 6年生の体験入学を企画	まちの温度計をあげよう、みらいのまちを考えよう⑥ 未来のまちをシミュレーション 子どもたちの笑顔があふれるまちづくり		
2年生 70時間	学校温度計をあげよう⑧ 行事改革S・U・K・G 学校行事を自分たちで改革	まちの温度計をあげよう⑥ わくわくわ〜 仕事を通してまちとつながろう まちで生き生きと働いている人と出会う	みらいのまちを考えよう⑥ 住みたいまちNO.1高槻 10年後の高槻マニフェストを考える	
3年生 70時間	学校温度計をあげよう⑨ 体育祭改革 異年齢交流を盛り込み、主体的に創る体育祭へ	まちの温度計をあげよう、みらいのまちを考えよう⑦ マイタウンミーティング 今の出会いと未来の私 自分たちの生き方やまちづくりについて考える		

「いまとみらい科」は、小学1年生~小学4年生を「前期」、小学5年生~中学1年生を「中期」、中学2~3年生を「後期」とし、9年間を通して、社会参画力の育成を目指している

\*同校の資料を抜粋して編集部で作成

用する力)、③見通す力(見通しを持って課題に取り組む力)、④つながる力(人や社会とつながりつづける力)に整理し、「社会参画力」と名付けた。沖田厚志校長はこう語る。「生徒と接していて気になっていたのは、物事を判断する時、『保護者に聞いた』『友だちが言っていた』と、限られた情報で決める点です。また、思いを上手に表現できず人間関係が築けない生徒も目立ち、人とかかわり方を学ぶ必要を感じました」

また、「学ぶ意味」を見いだせない生徒が多いことも課題だった。首席の山本佐和子先

「いまとみらい科」では、「総合的な学習の時間」の学びに特別活動とキャリア教育の視点を生かし、子どもにとって、身近な社会である家庭や学校、自分の住む地域・社会から課題を見つけ出し、自分たちが出来ることを考え、働き掛けることによって、「社会参画力」の育成を目指している。

子どもがリアリティーを持って課題と向き合うためには、「学ぶ意味」を明確にして授業に臨むことが必須であり、これに徹底してこだわる学習法が、同校区が開発した「SRPDCA学習サイクル」(P.20図2)だ。まず、課題と自分の関係を見つめ(S=スタ

生は言う。「学校での学びが将来の役に立つという実感が持てていない生徒が目立ちました。『なぜ勉強をするのか』『勉強しても意味がない』という問いに、教師自身が明確に答えられないという反省もあり、学校の学習は将来につながっていることを生徒に実感させ、意欲的に学ぶ姿勢を育みたいと考えました」

「学びの空洞化」を埋め、「社会参画力」を育むため、小学1・2年の生活科の一部と小学3年から中学3年の「総合的な学習の時間」から「いまとみらい科」を創設した。

## ●「いまとみらい科」の工夫 課題と自分との関係を徹底的に問い 課題にリアリティーを感じさせる

ンディング)、多様な情報を収集・分析して視野を広げて解決法を考え(R=リサーチ)、計画し(P)、実行(D)する。事後は、何が出来て、何がうまくいかなかったのか「学び」を振り返り(C)、学んだことを自分の生き方に返して次の行動意欲につなげる(A)。

最も大切に行っているのが「S」だ。課題に取り組む前に、この学習が自分にとってどの



高槻市立富田小学校  
**榎野麻人** まさこの・あさこ  
小中一貫・研究担当「子どもたちのたくさんの可能性に気づき、伸ばし、高め合える教育をしていきたい」



高槻市立赤大路小学校  
**北畠 真** きたばたけ・まこと  
小中一貫・研究担当。「子どもに対して大人に対して、教師という仕事に対して、誠実でありたい」



高槻市立第四中学校  
**馬場彰一** ばば・しょういち  
小中一貫・研究担当。「小学校と中学校を子どもの笑顔でつなぎ、共に今と未来を切り拓く力を育みたい!」



高槻市立第四中学校  
**山本佐和子** やまもと・さわこ  
首席。「笑顔には人を動かす力がある」未来を創るこの仕事に向き合っていきたい」



高槻市立第四中学校校長  
**沖田厚志** おきた・あつし  
子どもたちの幸せのために、自分・他者・社会を見つめ、人となりが、地域社会に参画する力を育てたい」

図2 S-RPDCA学習サイクル



\* 同校の資料を基に編集部で作成

ような意味があるのか、課題に対する自分の立ち位置を考え、課題解決に向けての意欲を喚起している。例えば、昨年度の単元「住みたいまちNo.1高槻」では、まず、高槻市の職員を学校に招き、少子高齢化や福祉などが市の課題であることを聞いた。その上で、高槻市を住みたいと思われる町にするために出来ることを考え、10年後の高槻市のマニフェストを作成した。

「学習意欲が低いのは、課題を自分のこととして捉えていないからだと考えています。課題にリアリティーを持てるように、市職員に話してもらいました」(山本先生)

中学3年生の「マイタウンミーティング」今の出会いと未来の私」では、全16時間の最初の3時間を「S」に当てる。この単元は、地域住民に話を聞き、未来の町づくりを考え、タウンミーティングで交流するというもの。

図3 「Sカード」

カードの表には、「ソロタイムI」でテーマと自分とのかかわりについて書く。「知っていること・知りたいこと」「経験したこと・よかったこと・成功したこと」など考える視点がかかれてる  
\* 同校の資料をそのまま掲載

中学2年生の「いまとみらい科」で出会った人々や中学3年生の修学旅行で出会った沖縄の人々を思い出し、更に、小学校の社会科の副読本『わたしたちの町・高槻』を見ながら、誰に会って話を聞きたいかをグループで話し合い、共有することになり時間を掛けた。

「例えば、『いじめについて考えなさい』と課題を出すと、『自分には関係ない』とまじめに取り組まない生徒が少なからずいました。課題を自分のこととして捉えない限り、傍観者で授業が終わってしまいます。課題と自分とのつながりを理解させ、リアリティーを持たせることが、生徒の意欲を喚起するために何よりも大切です」(沖田校長)

**1人で考え、グループで話し合う  
この繰り返し思考を深める**

「いまとみらい科」の授業は、自分で考え

る(ソロタイムI)、それを4人1組で協力しながら課題解決に取り組み(コミュニケーション)、何を学んだかを可視化する(ソロタイムII)という順序で進む。

「S」「R」を追求する時は、「Sカード」

「Rカード」というワークシートを活用する。冒頭に紹介した体験入学の企画を考える際には、ソロタイムIで「小6の時、わくわくしたこと、不安だったこと」をメモし、コミュニケーションタイムで仲間と意見を交換し、ソロタイムIIで自分なりの「おもてなしプラン」を記入した(図3)。

研究推進事務局は、ワークシートの作成だけでなく、「一貫研ニュース」を定期的に発行し、3校の全教員に配布して、活動報告や生徒の様子、地域の声などをリアルタイムで伝えている。

「『子どもがこんな顔をしていた』『地域からこういう声があった』など、活動の成果を可視化して伝えていきます。同じ取り組みでも、『来年はここを変えよう』『生徒にこういう人たちが会わせたい』というように、先生方の意欲喚起を期待しています」(山本先生)

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

## ● 取り組み継続の工夫

### 「いまとみらい科」の成果を教科指導に取り入れる

13年度から、小中共に、S—RPDCA学習サイクル、ソロタイムI→コミュニケーションタイム↓ソロタイムIIの過程を教科指導に取り入れ始めた。教科指導でもポイントとなるのは「S」だ。例えば、中学2年生の理科では、天気の変化を学ぶために、「この町ではチョコレートの匂いがあると雨になる」という都市伝説を解き明かすことを「S」とし、学習内容を実生活に近付けた。また、「S」と並んで重要なのが既習事項との関連を探る「R」だ。人事交流により4年前に富田小学校から赴任した馬場彰一先生は言う。

「1時間の授業で使える既習事項を『学びの倉庫』として生徒に提示し、今の学習とのつながりを意識させます。生徒に既存の知識を活用する喜びを感じさせるだけでなく、教師も今の単元がどこにつながっていて、どのように発展していくのかを意識して授業が出るようになりました」

13年度は年3回、小中合同の「S会議」を実施した。3校の教師が各教科に分かれ、その教科を学ぶ意味や9年間の学習内容のつながり、連携の方法を話し合い、教科の存在意義や子どもに付けたい力を再確認した。

こうして小中が話し合う場は大きな刺激に

なると、赤大路小学校の北畠真先生は話す。

「中学校のシステムや文化から刺激を受けることは少なくありません。何かあると学年として動ける組織力が中学校の強みだと思います。教科の専門性や指導に対するプライドも見習う点が多いと感じます」

一方、中学校にとっても、小学校の丁寧な指導が参考になるといえる。互いの良さを認め合う関係性が構築されているのも、小中連携が好調な理由の1つといえるだろう。

## ● 成果と課題

### 「学校をつくるのは自分」参画意識を高める生徒たち

小中連携を始めて4年、成果は着実に表れている。生徒へのアンケートでは、「いろいろなことについて一生懸命考えることが出来る」「自分と課題の関係を見つめることが出来る」と回答する生徒が2年間で10ポイント以上増えた。「自分の町が好きである」「いろいろな人と出会うことは楽しい」と答える生徒も8割を超える。社会問題を見つけて署名活動をしたという生徒、職場体験の事業所を見つけて交渉する生徒などが増えている。

「学校がつまらないのを他人のせいにする風潮は減り、『自分たちで行事を盛り上げたい』『昨年よりも良いものになりたい』と自ら企画・運営に参画するようになりました。学校での学びを自分のものとして受け止める意

識が高まっていると感じます」(山本先生)

馬場先生は、「根拠を持って物事を考えたり、話をしたりする生徒が多くなりました。学習サイクルの『R』の部分でアンケートやデータを根拠に考える学習を繰り返してきた成果だと思えます」と思考力や表現力の向上を指摘する。更に、中1ギャップが減少したと、富田小学校の榎野麻人先生は話す。

「本校は小規模校なので、中学校進学後、友人関係や学校生活に馴染めないと悩む卒業生が少なくありませんでした。しかし、小中連携を始めてから、卒業生の中学進学後の様子がとても落ち着き、学校が楽しいと聞くことも多くなりました」

最も大きな成果は、教師が生徒の変化を感じ、充実感を持って教育活動に取り組めるようになったことだ。

「Aさんがこんな表情をしている、Bさんが自分から周りに話し掛けている、Cさんが笑顔でありがとうと言っている。そうした生徒の様子の一つひとつが、私たちの喜びであり原動力にもなっています」(山本先生)

「小学校から本校に赴任し、初めて3年間受け持った生徒が昨年、卒業しました。その時の感動は今も心に残っています。生徒がどのような姿で義務教育を終えていくのかを常に問い続け、全力を尽くして指導に当たっていけば、本校区の教育はもっとよくなると確信しています」(馬場先生)

# 全ての教育活動を キャリア教育を意識したものと する

キャリア教育の本来の目的は、あらゆる教育活動を通して社会で必要な力を身に付けることにある。キャリア教育の真のねらいとは何か、受験指導との両立は可能か、今ある教育活動をどのように見直していけばよいのか。筑波大の藤田晃之教授と東京都府中市立府中第三中学校の谷合しのぶ校長に語っていただいた。

## 職場体験が前年度踏襲の 恒例行事となっていないか

——最初に、文部科学省が目指しているキャリア教育の方向性を教えてください。

**藤田** 柱は2つあります。1つは、教科指導を含めた全ての教育活動でキャリア教育を実践すること、もう1つは体験活動の更なる充実です。これらの教育・体験活動を通して、基礎的・汎用的能力を養うことが最大のねらいです。その背景には、子どもの学ぶ意欲の低下があります。「なぜ勉強するのか分からぬ」「勉強が将来にどうつながるのか分からない」という思いに対して、キャリア教育を通して学習意欲の向上、学習習慣の確立を図ることが期待されています。

**谷合** これからの時代、将来を楽観することは出来ません。自分の力で道を切り開いていかなければならないことを、生徒は知っています。自分の良さや能力を理解し、目標や夢を見つけれられるように、全ての教育活動を通して生徒に働き掛けることが重要です。そのことを、国や自治体は学校現場にきちんと伝えてきたのでしょうか。2年生を中心として行われる職場体験が始まった時、「望ましい勤労観・職業観の形成」という言葉が出たために、多くの先生方が「職場体験がキャリア教育そのものである」と捉えました。基礎学力の定着と、主体的に学ぶ態度の育成を目指したキャリア教育の定義が、学校現場に浸透していないことが最大の課題だと思えます。

**藤田** 職場体験は恒例行事化している学校が

多いと思います。例年通りに手続きをし、当日を迎え、事故なく終わって良かったと、つがなく終了すること自体が目的になっているように見える学校があることは残念ですね。

**谷合** 生徒は職場体験で初めて社会に接し、多くのことを学びます。それが、生徒にとってのキャリア教育のスタートです。職場体験で得た気付きや失敗から自分に足りないものを知り、どのようにして克服すればよいのかを考えることが、職場体験を生き取り組みにするポイントだと思います。本校では今年度の職場体験で、受け入れ先の事業所から厳しいお叱りを受けました。あれだけ準備をして自信を持って送り出した生徒が、職場で友だちに流されて規律を軽んじる行動をしました。生徒に責任の重さを感じさせるために、



# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

**筑波大人間系教授  
藤田晃之**

ふじた・てるゆき◎筑波大大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。博士（教育学）。専門は教育制度学、進路指導、キャリア教育。中央学院大商学部助教、筑波大大学院准教授、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官等を経て、2013年から現職。



**東京都府中市立府中第三中学校校長  
谷合しのぶ**

たにあい・しのぶ◎教職歴32年。同校に赴任して4年目。東京都の公立学校教諭。東京都教育委員会、瑞穂町教育委員会学校指導課長などを経て現職。



府中市立府中第三中学校◎「自他の敬愛」を校訓とし、3年間を見通した教育活動を推進。学力向上やキャリア教育に力を入れている。生徒数613人。

教師の引率の下、事業所に謝りに行かせました。仕事は責任が伴うものであることに気付く良い機会になったと思います。

## 「誰かのためになることをする」 のが仕事の本質

——「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」という予測（\*）があります。不確定で予測できない未来を生き抜く力を育むために、中学校のキャリア教育が果たすべき役割はどのようなものだとお考えですか。

**藤田** 文部科学省は、発達の段階ごとにキャリア教育のねらいを定めています。小学校は進路の探索・選択にかかる基盤形成、中学校は現実的探索と暫定的選択、高校は現実的探索・試行と社会的移行準備です。中学校段階ではあくまで「暫定的」な選択であることが、高校と異なります。職業体験というと、高校のインターシップは、ある程度、自分が進みたい方向性を想定して職場を選びますが、中学校では自分がその職業に就くか就かないかは脇に置いて考えられます。仕事内容よりも、働くとはどういうことなのか、仕事の本質を学ぶことが中心になるわけです。

これからも社会では次々と新しい仕事生まれ、消えていくでしょう。このように職業の新陳代謝が激しいのは、商品やサービスの

受け手のニーズに合わせて細かく応えようとする人がいるからだと思います。つまり、「誰かのためになることをする」のが仕事の本質であり、変化が激しい時代だからこそ、このような本質の部分を子どもに伝えていかなければならないと思います。

よく「やりたいことが分からない」「就きたい職業がない」という若者がいます。それは、「自分中心」で仕事を考えているからではないでしょうか。そうではなく、自分が働くことによって笑顔になってほしいのは、子どもか、高齢者か、けがをしている人か、忙しくて困っている人か……。誰の笑顔を見たいのかを考えさせると、違った答えが出てくるかもしれません。

**谷合** 本校では、1・2年生の夏休みに「キャリア面接」を行います。1年生は副校長が、2年生は校長の私が、生徒全員とグループ面接を行い、将来の夢や頑張っていることなどを聞きます。私は生徒に「どういう生き方がしたいか」「どんな大人になりたいか」と尋ねるのですが、生徒の7割は具体的な職業名を答え、残りの3割は「人の役に立つ仕事がしたい」と言います。「人のために生きたい」「人の役に立ちたい」という思いを育むことが、中学校におけるキャリア教育のゴールの1つだと思っております。

もう1つ、私たちが日々生徒に伝えているのは、感謝する気持ちの大切さです。相手に

\*アメリカ・デューク大の研究者キャシー・デビッドソン氏が2011年8月、「ニューヨークタイムズ」で語った予測



感謝したり、感謝されたりすることによって、自己有用感が高まり、集団や社会の中での生きがいややりがい、自分はここに生きて存在しているという実感を持てるのだと思います。考え方や育ち方の違う生徒と一緒に生活する中で、時に仲間と認め合い、集団としておもしろいと思うことは正していく。異質な集団の中で課題解決する経験を積むことが、どのような状況に置かれても、自分で将来を切り開いていく力になるのではないのでしょうか。

**藤田** 谷合先生のおっしゃる通り、自己実現は他者との関係の中でのみ出来ることだと思

います。そういう意味では、多様な背景や学力を持つ生徒が集まる公立中学校は、根源的な議論が出来る最良の場所ではないでしょうか。人とのかわりの中で自信が持てたり、逆に自分の小ささを実感したり、あるいは自分と全く違う見方を教えられたりする。そうした体験を通して、他者を認め合う心を育むことが、グローバル時代に必要な、異質な他者と協同する力にも発展するのだと思います。

### 高校入試に向けた学習を キャリア教育に位置付ける

——一方、中学校としては進学先を保障するという視点も忘れてはならないと思います。進学先の保障とキャリア教育はどのようにバランスを取ればよいのでしょうか。

**藤田** かつての進路指導が「出口指導」と呼ばれ批判されたのは、高校入試に合格することがゴールになってきたからだと思います。進学先が決まったらそれで終わりではなく、それを1つのステップとして将来を見つめ直す必要があると思います。例えば、多くの中学校では3年生までに「10年後の私」といった作文を書きます。それを読み返しながら、「君は高校進学というステップはクリアしたね。中学校での経験を生かしてどのように高校生活を過ごすつもりかな。高校卒業後はどうするの?」というように語り掛け、生徒に5年後、10年後の自分を展望させるのです。

**谷合** 本校では、1年生から高校の入試要項と本校の推薦基準を提示して、進路を意識させるようにしています。推薦基準を通して、1年生から学校生活について自分の目標をきちんと定めることが、進路や自立への1つの道筋にもなるからです。学習や部活動、委員会活動など学校生活の全てを前向きに取り組むことは、自分だけでなく、互いの向上につながります。そのことが社会を生きていく上でも必要な力になると、理解してほしいと考えています。

**藤田** 高校入試に向けた学習も、キャリア教育として位置付けることが出来ます。合格のために苦手教科に向き合ったり、学習計画を立てて実行し、成績が思わしくなければ軌道修正したりすることは、社会で仕事をする時にも必要になる力です。先生方がそれらをきちんと捉えて、「頑張っているな」「今、やっていることは将来きつと役に立つよ」と伝えることで、子どもは受験の意義を捉え直すことが出来るのではないのでしょうか。

また、高校入試が近付くと、入試の頻出問題を扱うと思いますが、これは高校進学後や社会で必要な知識だからこそ入試でも必ず問われるのです。「入試で絶対に出るぞ」だけで終わらせず、「高校に入ったらかんな内容に発展する」「社会ではこのような場面で使われている」というように、なぜその内容が出題されるのか、どのように将来につなが

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

ていくのかを意識させれば、生徒も前向きに受験勉強に取り組むのではないのでしょうか。

## 「教師も社会人」という意識を持つことでキャリア教育は充実する

あらゆる教育活動を通してのキャリア教育を実現するために、学校現場や先生方にはどのような心構えが必要でしょうか。

**谷合** 教師自身が社会人として自分を磨く意欲を常に持ち続けることが、大切ではないでしょうか。本校では、2年生の職場体験で、2年生の先生方だけではなく、1年生、3年生の先生方とも分担して、受け入れ先の事業所にあいさつに行きます。職場体験を学校全体の取り組みにすると共に、先生方に生徒が将来働くであろう社会を身近に感じ、視野を広げてほしいからです。学校の外での体験を重ねていただきたいと思っています。

**藤田** 先生自身が、等身大の社会人としての自分をサンプルとして開示することもよいと思います。教師になった理由、仕事の喜びや大変さなどを、生徒に話す機会を設けてみてはどうでしょうか。そうすることで、「自分が話しきれなかったことは、PTAの方や社会人講話などで外部の人に話してもらおう」というように、先生方の意識も外に向かっていくのだと思います。

**谷合** 管理職がリーダーシップを取り、キャリア教育の全体像を具体的に示すことも大切

だと考えます(図)。キャリア教育で育てたい生徒像、卒業までに身に付けさせたい力、学校全体の中のキャリア教育の位置付けなどを明確にする。それによって、先生方は自分たちが今どこにいて、どの方向に進んでいくのが分かり、足並みをそろえて指導でき

図 府中市立府中第三中学校「平成26年度 キャリア教育 全体計画」

### キャリア教育の全体目標 社会性の確立と自立心の育成・よりよく生きる力の形成

キャリア教育で身に付けさせたい力			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<b>自他の理解能力・コミュニケーション能力</b> 多様な他者の考え方の理解、相手の意見を聞き自分の意見を正確に伝える、自分の立場や状況を受け止め役割を果たす、他者との協力、社会を形成する力	<b>自己理解能力・自己管理能力</b> 社会との相関関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動する、思考や感情を律しつつ今後に向け進んで学ぼうとする力	<b>計画実行力・課題解決能力</b> さまざまな課題を発見・分析し適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する力	<b>情報収集・探索能力、職業理解力、役割把握・認識能力、計画実行力、選択能力、課題解決能力</b> 「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべきさまざまな立場や役割との関連を踏まえて主体的にキャリア形成する力

学校教育目標を実現するため、全体計画では、4つの能力を育成するための具体的な手立てとして、学年ごとに「日常生活」「各教科」「道徳」など6つの場面に分け、それぞれにすべきことを明示している

\*府中第三中学校の資料から抜粋して編集部で作成。全体はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます  
<http://berd.benesse.jp> →HOME>教育情報>中学校向け

るようになるはずですが、また、取り組みのねらいを一つひとつ明示することで、本当に生徒にその力が付いたのかどうかを評価しながら指導できます。そうしたことは負担になるかもしれませんが、取り組みを一からつくり直すわけではありません。これまで行ってきたことをキャリア教育の視点で整理するだけで十分可能です。キャリア教育は特別なものではなく、これまでずっと中学校で指導してきたものであることを、先生方に気付いていただきたいと思っています。

**藤田** 今ある教育活動をキャリア教育の視点で捉え直すことは、非常に重要です。例えば、人間関係形成能力を高めるにはどうすればいいのかを考える時、キャリア教育の視点から学校の取り組みを見ると、体育や音楽の授業、学び合い活動、学校行事など、日常のさまざまな活動がキャリア教育の重要な機会でもあることに気付くでしょう。教師がそれを意識するだけで、生徒に掛ける言葉が異なり、生徒の成長の捉え方も自ずと変わっていくと思います。学び合いでAさんをフォローしていたね。Aさんはとてもうれしかったと思うよ」などの声掛けが生徒の自己肯定感を高め、キャリア形成につながるのです。既に行っている教育実践の価値を再認識するために、今ある活動をキャリア教育として捉え直す視点を持つことが大切だと思います。

——本日はありがとうございました。

# 小・中・高校の12年間を通じて 教育課題を考え、語り合う

## 「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

特集テーマである「キャリア教育」は、中学校段階だけでなく、小学校、高校と子どもの成長を連続的に捉えて、指導のあり方を考えることが大切であろう。そのような課題意識の下、ベネッセ教育総合研究所は、学校種を超えて先生方が語り合うワークショップを開催した。

### 学校種を超えて子どもの未来を考える

グローバル化や情報化など、今後の社会環境の変化に対応し、「生きる力」を育むためには、学校種を超えて、子どもの成長を連続的に捉えていくことが一層重要になる。教育現場ではこの必要性を踏まえた取り組みが行われており、『VIEW21』小・中・高校版でも、多くの小中連携、中高連携などの事例を紹介してきた。しかし、先生方へのアンケートなどから、自治体等の公的な働き掛けがないと、学校種を超えて先生方が直接語り合う機会を持つのはなかなか難しいことが見えてきた。

そこで、ベネッセ教育総合研究所は、小・中・高校の先生方がさまざまな教育テーマに

### ワークショップの流れ

**13:00** オリエンテーション、自己紹介

**14:00** ワールドカフェ形式(\*)で「現状を知り合う」

異なる学校種の先生4～5人でグループをつくり、語り合う。1テーマ2ラウンド、計4ラウンドを、各回グループを替えながら行った。

\*ワールドカフェ形式：組み合わせを替えながら、少人数での会話を積み重ね、組織的な探求につなげていく対話の手法。

◎1・2ラウンド(各20分)

「12年間を通した学び」を考える上で小学校、中学校、高校それぞれについて、どんな「良さ」「問題点」を感じているか？

◎3・4ラウンド(各15分)

「12年間を通した学び」がどうなれば理想的だと思うか？ そのためには何が必要か？

**15:40** 休憩

**15:50** 「オピニオンをつくる」

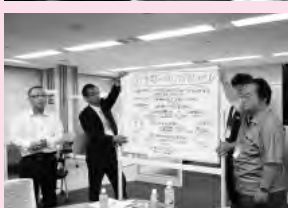
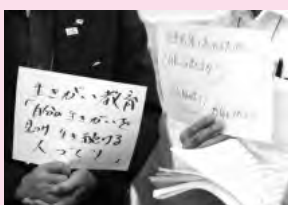
◎「12年間を通したより良い学びのために、教師(私たち)が出来ること」として、話し合いたいテーマを個々で考えて提示

◎テーマに沿ってチームを組み、チームごとにオピニオンをつくる

**17:00** 発表

◎5チームがそれぞれのオピニオンを発表

**17:20** まとめ



### Teachers' cafe

#### 第1回ワークショップ概要

- ◎目的 小学校、中学校、高校の先生方が率直に語り合い、「12年間を通したより良い学びのために、教師が出来ること」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること
- ◎日時 2013年9月28日(土) 13～18時
- ◎参加者 全国の先生方19人  
(小学校7人、中学校6人、高校・大学6人)
- ◎募集方法 『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など
- ◎会場 (株)ベネッセコーポレーション新宿オフィス
- ◎主催 ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局
- ◎企画運営協力・当日ファシリテート 與良昌浩氏(株式会社もくてぎ)、宮崎圭介氏(株式会社スコラ・コンサルト)

# 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

ついて率直に語り合い、ワークショップなどを通じてオピニオンをつくり上げていく「Teachers' cafe」を企画した。

**見えてきた小中高をつなぐキーワード**

第1回ワークショップは「12年間を通したより良い学び」をテーマに、2013年9月に開催。全国から19人の先生方が参加した。やや緊張した先生方の雰囲気は、「現状を知り合う」セッションを機に変化していった。開始直後は、他の学校種に対する疑問や要望に偏りがちだった議論は、互いの状況や思いが分かるにつれ、連携して子どもを育むための検討になっていった。その後、個々の関心に沿って、「志」「学力保障」「生きぬく力」「学びの意欲」「キャリア教育」の5つのチームを編成し、12年間で実現させたいことやそのためのアイデアをオピニオンとしてまとめるところまで共通理解が進んだ。

議論が深まっていった背景には、「より良い学び」のためのキーワードを、学校種を超えて共有できたことがある。「学び続ける意欲」「自尊感情」「伝え合う力」「教師の専門性」など、学校種ごとに用いる言葉が違っていたとしても、目指す子どもの姿、そのための指導への課題意識や熱意は同じだと確認できた。それぞれの学校種でどのように指導し、12年間をつなげていくのかは今後の課題だ。今回の議論を生かしながら、先生方と共に考えていきたい。

ついて率直に語り合い、ワークショップなどを通じてオピニオンをつくり上げていく「Teachers' cafe」を企画した。

**見えてきた小中高をつなぐキーワード**

第1回ワークショップは「12年間を通したより良い学び」をテーマに、2013年9月に開催。全国から19人の先生方が参加した。やや緊張した先生方の雰囲気は、「現状を知り合う」セッションを機に変化していった。開始直後は、他の学校種に対する疑問や要望に偏りがちだった議論は、互いの状況や思いが分かるにつれ、連携して子どもを育むための検討になっていった。その後、個々の関心に沿って、「志」「学力保障」「生きぬく力」「学びの意欲」「キャリア教育」の5つのチームを編成し、12年間で実現させたいことやそのためのアイデアをオピニオンとしてまとめるところまで共通理解が進んだ。

議論が深まっていった背景には、「より良い学び」のためのキーワードを、学校種を超えて共有できたことがある。「学び続ける意欲」「自尊感情」「伝え合う力」「教師の専門性」など、学校種ごとに用いる言葉が違っていたとしても、目指す子どもの姿、そのための指導への課題意識や熱意は同じだと確認できた。それぞれの学校種でどのように指導し、12年間をつなげていくのかは今後の課題だ。今回の議論を生かしながら、先生方と共に考えていきたい。

## 当日の様子や先生方のオピニオンはウェブサイトで詳しくご覧いただけます!

ワークショップの様子や先生方が作成したオピニオンなどは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内「Teachers' cafe通信」に掲載しています。ご意見がございましたら、フェイスブックやツイッターでぜひお寄せください。また、2014年2月開催予定の第2回ワークショップについても随時お伝えしていきます。

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

## ベネッセ教育総合研究所は幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校、大学の先生方を支援しています!

ベネッセ教育総合研究所は、園から大学までの教育・保育に携わる方々を対象とした教育情報誌を刊行しています。記事は全て、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにPDFで掲載しています。ぜひ一度、ご覧ください。



<http://berd.benesse.jp/> >教育情報

\*新規での冊子のご送付のご依頼は承っていません。ご了承ください。

## 参加した先生方からのご意見・ご感想

◎「教師が率直に語り合い、オピニオンをつくる」ことは、とても大切だと思う。ポトムアップで「未来の教育」に貢献できるとしたら、教師冥利に尽きる。(栃木県/小学校)

◎異なる地域であっても、基本的に同じ方向性だと感じた。12年間を見通すためには、校種が違う先生方ともしっかりと踏み込んだ意見交換があるとよいと思う。(香川県/小学校)

◎ワークショップでは、時間が経つのが実に早く感じられた。今後、近隣の小・中学校で交流会があるので、この内容の一端は話し合いの中で還元していきたい。まずは、自分の足元から一步一步である。(北海道/中学校)

◎教育について多様な考え方があること、自分の知らないことが小学校や高校にたくさんあることを学んだ。出来れば、このような場を今後も設けてほしい。(岐阜県/中学校)

◎学校種の違いを感じることなく、いろいろな先生方と1日を過ごせた。さまざまな教育活動に取り組む先生方の情熱は同じものだからだろう。校種を超えて縦にもニューロンを伸ばしていけたら、私たち教師の努力は、よりストレートに生徒に届くと感じた。(岩手県/高校)

◎全国の先生方から大いに刺激を受けると共に、直面する一つひとつの課題を克服するためには校種を超えた協力が欠かせないことを実感した。これを機に先生方と連絡を取り合っ小中高の連携のあり方を考えていきたい。(福井県/高校)

大分県立大分豊府中学校では、2013年5月の1か月、教師全員に1台ずつのタブレット端末が県教育委員会から貸与された。大分県のICT活用研究校の指定を受け、生徒用タブレット端末40台が導入されることに先立ち、教師が試用して授業での活用法を探るためだ。

「初めてタブレット端末に触れる教師もいましたが、1人1台持てたことで各自が

## 大分県立大分豊府中学校

# ハードに加え、人材育成で教育情報化を推進

「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」

(文部科学省、2012年)の結果を見ると、

電子黒板やデジタル教科書が急速に普及している一方、

ICT活用に関する研修を受けた教師は

3割にも満たないことが分かった。

予算の確保が重要な機器の整備に目が向きがちの中、

ICTを使いこなす人材の育成に

組織的に取り組む事例を紹介する。

## School Data



### 大分県立大分豊府中学校

◎ 2007 (平成 19) 年開校。県内唯一の県立中学校で、大分豊府高校と併設型中高一貫教育を行う。話し合い活動を中心に、思考力、判断力、表現力の育成に力を入れる。

校長 有定裕雅先生 / 生徒数 約 360 人 / 学級数 9 学級 / 所在地 〒 870-0854 大分県大分市大字羽屋 600-1 / TEL 097-546-2404  
URL <http://kou.oita-ed.jp/oitahoufutyu/>

降を考慮して教師全員参加とし、電子黒板のデモンストレーション、先進校の視察報告などを行った。

「教育のICT化というと、モノの整備に意識が向きがちですが、使いこなせる人材がいなければ効果は期待できません。指導でのICT活用には、教師の意識も活用力もまだまだ大きな差がありますから、研究では、ICT環境の整備は県の教育財務課と相談しながら進め、校内では教師の指導力育成に力を入れ、ハードとソフトが一体化して推進できるようにしています」と、有定裕雅校長は研究のポイントを話す。

### 校長を最高責任者とした組織体制に

同校の研究は、大分県教育委員会が13年2月に発表した「大分県教育情報化推進戦略2013(以下、推進戦略)」の1つである。推進戦略では、文部科学省が11年に策定した「教育の情報化ビジョン」を踏まえ、方針を①教育情報化推進体制の確立、②子どもたちの情報活用能力の育成、③学校教育の情報化、とし、具体的な施策を明示した。推進戦略の主管である教育財務課の足立正和指導主事はこう語る。

「本県は、文部科学省の調査結果を見ると、コンピューターの整備率は生徒用も教師用も全国でも上位でしたが、ICTを活用した指導能力は全国平均を下回っていま



大分県立大分豊府中学校校長

**有定裕雅**

ありさだ・ひろまさ 「校長の仕事は部下の育成。20年先の教師を育成する気持ちで私も勉強している」



大分県立大分豊府中学校副校長

**安藤英俊**

あんどう・ひでとし 「いろいろ検討を重ねながら、本校ならではのICT活用を模索したい」



大分県教育庁教育財務課指導  
主事

**足立正和**

あだち・まさかず 「学校が兼ねなくICTを使えるよう尽力していきたい」

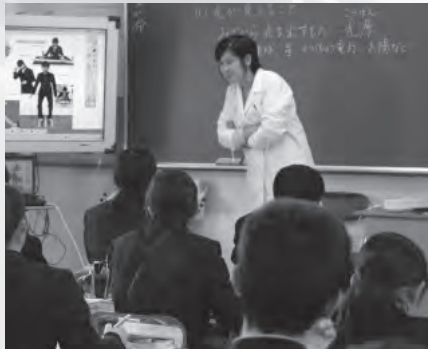


写真 理科の授業では、実験ではなかなか見せられない資料を映し、生徒の好奇心を引き出す。映像と音と一緒に出るため、注目させやすいのもメリットだという

した。教育情報化をICTに長けた一部の教師に頼るのではなく、学校全体で組織的に取り組んでいく必要がありました」

そこで、各校に教育情報推進委員会を設置し、校長を「学校CIO（最高情報統括責任者）」、副校長・教頭を「情報化推進リーダー」、教務主任等を「情報化推進員」に任命。更に、この具現化に向け、校長研修、副校長・教頭研修を13年度中に各2回行うと共に、ICTに関する校内研修の年3回実施を促し、教師のICT活用への意識を高めようとしている。

**未来の教師の育成も担っている**

同校は、教育情報化推進委員会を「HIT (Hofu Information Tablet)」と名付け、情報化推進委員に、教務主任、情報分掌の主任・副主任、1学年主任、総学主任、事務長を任命して研究を進めている。

「ICTに詳しいか否かを問わず、ミドルリーダーの教務主任を推進員に任命し、率先して取り組んでもらっています。更に、将来的に『総合的な学習の時間』でのICT活用を想定して総学主任を、ハードとソフトを一体化して検討するために事務長を委員としています」（有定校長）

生徒用タブレット端末は10月に導入され、1年生3クラスの授業や朝学習「豊府タイム」で活用が始まった。例えば、英語科の授業では電子黒板に英文を映し、生徒はそれを見ながら音読する、理科や社会科ではインターネットから引用した資料を電子黒板やタブレット端末で見せ、生徒の関心を高めている。

「生徒が顔を上げて電子黒板に集中するため、表情を見ながら説明できる、ちゃんと活動しているかが分かったといった利点と教師は挙げています。一方で、単に映像を見せるだけでは生徒は飽きてしまうため、ICTはあくまでも手段として、適切な場面ですることが重要だと実感できました。今後は、本校の特色である話し合い活動に活用したいと考えています」（安藤副校長）

授業での実践は、毎週月曜4限に開くHIT定例会で共有し、指導力向上に向けて検討を重ねている。この会には、足立指導主事も参加し、県とも情報を共有している。実践を始めたばかりだが、11月には「豊

府タイム」と授業を公開。県内の中学校では1人1台のタブレット端末を使った授業は初めてとあって注目度は高く、県内の小・中学校などから約50人の参観があった。

「今までICTに触れたことがあまりなかったけれども、ICTの効果を実感し、デジタル教材の作成に挑戦している教師もいます。授業公開で生徒の様子を直接見ていただくことで、県内にICT活用の意識が高まればと考えました」（安藤副校長）

ICT研修の意義について、有定校長は、「本校には県内の市町村から赴任している教師もいます。いずれ自治体に帰った際に、本校での実践を広めてもらうことも期待しています。ICTの進歩はめざましく、機器の整備には財政の課題も多くあります。しかし、未来の教師を育成する観点でも、今ICTの研修を進めることが重要だと考えます」と語る。

12月、全クラス対抗の「数学の鉄人大会」が体育館で開かれた。全7問をクラスで協力して解き、速さと正確さを競う。今回は、タブレット端末を使ってクラスの解答を提出し、スクリーンに映した。自分たちの出した答えが大画面に表示されることに生徒は大いに盛り上がり、クラスが力を合わせて問題に真剣に取り組む姿が見られた。教師もまた、ICTを活用しながら新たな指導に挑戦している。



ミドルリーダーの挑戦  
—前へ! 前へ!!

# 教師全員の力を伸ばせるように 校内研究を活性化させていきたい

東京都墨田区立本所中学校 駒田るみ子 54歳



Middle Leader

こまだ・るみ子◎教職歴32年。宮崎県宮崎市立宮崎西中学校に勤務後、東京都へ転居。墨田区立音響第二中学校などを経て、本所中学校に赴任して3年目。担当教科は国語科。主幹教諭、教務主任。

これまで私が歩いてきた道のり

**生徒の目を  
授業に向けられず  
教師を辞めようと思った**

私の教師人生は、1学年10クラスほどある大規模校で始まりました。国語科には先輩の先生方が8人いて、校内研究を盛んに行っていました。この先輩方に教えていただいたからこそ、私は教師を続けてこられたのだと思います。

新任時の私の授業は、言葉の意味や筆者の考えなどを丁寧に説明するというものでした。そうしないと生徒には伝わらないと考えていたからです、生徒の興味は引き付けられ

ませんでした。私語をする生徒や下を向いている生徒ばかりが目立ったのです。授業がうまくいかない日々が続く、情けなさが募りました。赴任3か月目には、自分が教師に向いていないのではないかと思うようになったほどです。そんな気持ちを先輩に伝えたところ、返答はシンプルでした。「もう1年間頑張ってから辞めても遅くはないよ」と。

この一言で、肩の力が抜けたような気がします。「新米教師なのだから、まだまだ努力しなければならぬ」。そう思い直した私は、時間をつくっては先輩の授業を見学しました。気付いたのは、どの先輩も生徒

にしっかりと考えさせる授業をしていたことです。自分が一方的に説明し過ぎていたことを痛感しました。

校内研究で進めていた、観点別評価を取り入れた指導案作りにも、積極的にかかわりました。私の担当は、3学年分の指導案の原案作りです。自分に出来るだろうかと不安でしたが、先輩方からの期待に応えたいという気持ちの方が強くありました。私が試作した指導案は、先輩に赤ペンでびっしり添削されて返されました。何度も書き直しましたが、私は先輩の指示にただ従うだけでなく、納得がいくまで質問しました。的外れな質問もあったはずですが、どの先輩もじっくり考え、答えてくださいました。

先輩から学んだことは、自分の授業に取り入れました。品詞分解の時には生徒にグループワークをさせるなど、教え込みにならないように工夫を重ねたのです。すると、発言する生徒が少しずつ増えていき、授業に活気が出てきました。私の発問に対してしっかりと考えて答えている様子も見て取れるようになりました。やがて私は、生徒の力を伸ばす授業が出来るようになったのです。



## 学年を1つにまとめ 教科を横断した 取り組みを企画

30代で学年主任を務めるようになって、担当していない教科の年間授業計画にも目を通す機会が増えました。他教科にも国語の学習内容とかかわる単元があることに気付いた私は、複数の教科と連携し、生徒の視野を広げたいと考えました。そこで、教科の枠を超えて先生方と話し合い、教科を横断した取り組みを企画したのです。例えば、国語の授業で

俳句を学んでいる時、美術の授業では生徒が好きな俳句を選び、その情景を絵にするといった具合です。

最初は消極的な先生方もいましたが、続けていくうちにどの先生方も積極的になりました。「分かった!」という表情を浮かべ、学習に意欲を見せる生徒が増えたからこそ、教師の考えも変わったのだと思います。

他教科と連携して授業をするようになり、私は国語が全教科と深くかわっていると実感しました。日本語の力を伸ばすことは、あらゆる教科の学力向上につながるはずで

### 今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

## 若手が積極的に 意見を述べられるように 環境の整備に力を入れる

私は教師になって以来、他の先生方と共に学ぶことで成長してきたと、身をもって感じています。主幹教諭を務め始めた10年ほど前から、校内研究の活性化に取り組みようになりました。自分のスキルアップだけでなく、後輩に教科指導のノウハ

ウを伝えるためです。私の経験では、生活指導困難校ほど教師の教科指導力を高める必要があると思います。

本校でも、私は校内研究に力を入れていきます。ただ、今の若手の先生方は、私の若い頃に比べて、自分の考えを言わなくなっているような気がします。話し合いをしていても、ベテランの発言ばかりが目立つのです。私は、若手が発言しやすいように、知っていることでもあえて若手

に質問し、説明を促しています。

教科指導のノウハウは、先生方が意見をぶつけ合ってこそ学べると、私は考えています。若手の先生方から尋ねられたことによって、教科指導の基礎・基本を再確認できたり、生徒の気質の変化に気付いたりすることがあります。若手が意見を言うことは、若手自身にもベテランにも気付きをもたらします。それだけ議

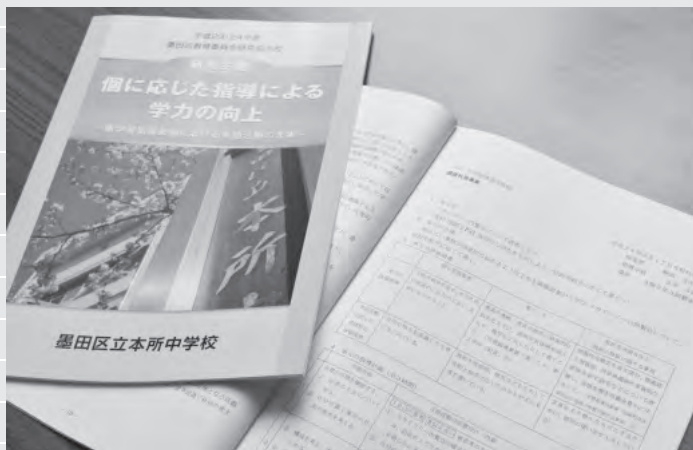
論が深まり、新たな取り組みにもつながるのです。若手の先生方には、見当違いであることを恐れず、自分の意見を堂々と口にする積極性を持つてほしいと思います。

生徒にとっては、教職経験に関係なく、教師は教師です。教師全員の力を伸ばすために、自由に意見を述べられる環境を整え、校内研究を更に活性化したいと考えています。

## 年1回以上の研究授業

### 駒田先生の取り組み

◎校内の教師全員に年1回以上研究授業をするように呼び掛けています。取り組みやすくするために、まず私が指導案を作り、これを原案にして各自が指導案を作るように伝えています。評価規準の設定の仕方など、私の指導ノウハウを先生方に具体的に示せるだけでなく、先生方に自分ならどうするかを考えてもらうきっかけにもなると期待しています。



駒田先生が作成した指導案（校内で形式をそろえ、研究テーマに応じた工夫を取り入れてある）。若手教師には「いつでも質問にきてほしい」と伝えている

## 2013 Vol.3 「1人で学べる生徒を育てる」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

\*「VIEW21」中学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp>)でご覧いただけます。

◎秋田県大仙市立西仙北中学校の事例では、なぜ1人で学ぼうとすると出来なくて、みんなと一緒に出来るのがよく分かりました。また、自分の宿題の取り組み方を自己評価する方法は、とても参考になりました。出来た・出来ないという評価だけで終わりがちですが、自分の取り組みの内容面まで振り返ることが重要だと分かりました。ぜひ、本校の教員にも紹介して、取り入れたいと思います。  
[大分県／D中学校]

◎富山県富山市立速星<sup>はやほし</sup>中学校の無監督テストは、取り組みだけを捉えると特異な例だと思いましたが、生徒と教師との信頼関係の構築という観点では、至極当然の結果だと気付きました。学校は、教師が生徒に一方的に命令する場ではなく、温かな心の交流を中心とした人間関係の醸成の場だと分かってはいましたが、今回の記事で改めて気付かされた思いです。  
[埼玉県／O中学校]

◎「学力の二極化の根本には、学習への意識の二極化がある」という香川県多度津町立多度津中学校の新名勝校長の言葉にはうなずけるものがありました。「どうせやっただって……」と投げやりな生徒でも、少し努力すれば「出来る、分かる」が実感できることを、繰り返し、粘り強く行うことが大事だと思います。意識と学力の向上は表裏一体のものだと思いました。  
[岐阜県／K中学校]

◎東京都鷹<sup>たかみち</sup>南学園の実践が大変印象的で、勉強になりました。コミュニティ・スクールを基盤として学校運営に当たる例は知っていましたが、三鷹市が市内7つの中学校の各学区を1つの学園として小・中一貫教育を進めて

いる様子がよく分かりました。  
[宮城県／S中学校]

◎京都教育大の伊藤<sup>たかみち</sup>崇達准教授が言われた「1人で学ぶための3つの要素」である「メタ認知能力の重要性」「生活習慣の見直し」「教師との信頼関係」は大変分かりやすく、非常に有益でした。特に宿題について「外的調整」で取り組ませるか、「取り入れ調整」で取り組ませるかは、今後、私が課題を行わせる際に役立つ視点であり、早速日々の教育活動に生かしたいと思います。  
[東京都／O中学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の高知県高知市立城東中学校の田中敏彦校長の「生徒が変わると信じて努力するのが教師の使命」という言葉が心に残りました。諦めずに粘り強く日々の仕事に取り組むことを忘れてはならないと、改めて感じました。  
[三重県／O中学校]

◎「Benesse 発 これからの教育」の東京都豊島区立千川中学校のタブレットPCを用いた取り組みでは、プレゼンテーションの作成や、ICTスキルの高い生徒による指導など、他の生徒に教えるための手法を使っていることが、全体の学力の向上につながっているのではないかと感じました。  
[広島県／H中学校]

◎「ミドルリーダーの挑戦」の大分県豊後高田市立高田中学校の堀之内健治先生の「自分の思いではなく、生徒の思いを大切にした指導」という言葉が印象に残りました。教師の役割は、生徒を育てることです。自己満足ではよくないということを肝に銘じました。  
[兵庫県／S中学校]

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム  
開催報告レポートのご案内

これからの英語の指導と学びを考える

—全国の高校入試分析結果と中高生の英語学習実態をもとに—

2013年12月1日、中学校・高校の英語教育を考えるシンポジウムを上智大学で開催いたしました。全国から270人を超える皆様にご参加いただき、ありがとうございました。指導事例のご紹介、ご参加の先生方とパネリストとの意見交換も行いました。これらを含めたシンポジウムの詳細なレポートを、2月下旬に下記ウェブサイトでご案内します。報告書もダウンロードできます。ぜひご覧いただき、今後のご指導を考える上でのご参考になりましたら幸いです。

詳しくは

<http://www.arcle.jp/>

\* ARCLE(アークル、Action Research Center for Language Education)は、ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です

編集後記

今の中学3年生が社会人となる頃、世の中はどのように変化しているのでしょうか。これから生きる社会がどのようなものであっても、また、生徒の選ぶ道がどんなものであっても、生徒自身が自分の選択に納得し、責任を持って、前を向いて人生を切り開いていく準備となるのが「キャリア教育」なのだ、取材を通して改めて実感しました。

『VIEW21』 中学版編集長 小林奈緒

VIEW21 中学版 2013 Vol.4

2014年2月19日発行／通巻第320号

発行人 岡田晴奈  
編集人 谷山和成  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション  
ベネッセ教育総合研究所

◎お問い合わせ先

情報編集室  
〒206-8686  
東京都多摩市落合1-34  
電話 042-311-3390

印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 中丸満、二宮良太  
撮影協力 荒川潤、川上一生、南弘幸  
イラスト協力 カモ、幸剛

色とりどりの学びの情景

## 校区全てですこやか週間!



表紙の学校 島根県出雲市立第一中学校



起床時間や就寝時間、メディアの視聴時間の目標は、医師や保健師らと一緒に検討して決めた。PTA作成のポスターは各校だけでなく、地域の公共機関などにも貼り、生活習慣の大切さを啓発している



「すこやか週間チャレンジカード」には、起床・就寝時刻、メディアの時間、朝食の摂取を記録する。保護者のコメント欄を設け、子どもの生活を見守れるようにしている



生活習慣の定着は、授業態度や提出物にも表れる。「すこやか週間」を起点にして生活のリズムを整え、学習や部活動などに励む生徒も多いという

出雲市立第一中学校では、毎月第1週に「すこやか週間」を行っている。自分で決めた起床・就寝時刻、メディア視聴時間を実践する週間だ。校区の保健師、保育所、幼稚園、小・中学校、大学が一体となった「一中校区すこやか部会」が6年前に始めた活動で、校区の3つの地区（保育所、幼稚園、小学校）も同期間実施。異校種でも兄弟姉妹が同じ取り組みをするので、子どもも保護者も正しい生活習慣を一層意識できる。

年々、理想的な生活習慣が身に付いている様子が見られていたが、携帯端末が浸透してきた影響が生活にも表れてきた。生徒保健委員会が「チャレンジカード」のより良い活用の仕方を発案し、改善を重ねて更なる意識付けを図っている。

地域ぐるみで見守られる中、10年後を見据えたこの生活習慣づくりが、健やかな成長の基盤として子どもたちに根付くことを願っている。

過去1年間の  
特集テーマ

Back Number

2013

Vol.3 1人で学べる生徒を育てる

Vol.2 生徒の心に火をつける

Vol.1 主体的に取り組む言語活動の工夫

2012

Vol.4 中学1年生の良さを伸ばす

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または  で 

2014年度 Vol.1 は 2014年6月上旬発行(予定)です